

婦人の子死と毛

第五卷  
第八號

## 謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歡迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡べて左の規則によるものとす。

- 一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書。
- 一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。
- 一、原稿は、一切返附せざることを。
- 一、封書の表には、凡て婦人子ども投稿と明記せらるべし。
- 一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。
- 一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

## 會告

本會に御入會なされんとする方は、會則にある通り會費は一ヶ月金拾錢ですから、其割合で女子高等師範學校附屬幼稚園内フレイベル會へ向け何ヶ月分か纏めてお納めの上、申込されると、雜誌は當會から無代價で御送附します。會員にならないで、たい雜誌丈け買つて御讀みになりたい方は、日本橋區本石町三ノ廿三金昌堂へ御注文下さい、一冊拾錢六冊前金五拾七錢十二冊前金一圓拾錢他に郵税が一冊一錢づゝの割合です。

明治三十八年八月二日印刷  
年八月五日發行

不許  
複製

發行所 東京市麹町區飯田町四丁目十二番地  
編輯者 東京市神田區錦町一丁目十九番地  
印刷者 東京市神田區錦町三丁目二十五番地  
印刷所 女子高等師範學校附屬幼稚園内  
發行所 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地  
發賣所 金昌堂

大賣捌所 東京 東京堂●同東海信文合資會社●同北隆館

# 婦人と子ども第五卷第八號目次

## 子ども

小さい別嬪さん.....

一頁

石屋の槌造.....

三

蛙になれ.....

六

懸賞考へもの披露.....

六

狐のちえ.....

一八

## 婦人と子ども

女の嗜.....

牧

羊一九

實驗上の育児法.....

醫學博士

瀨川昌耆述三

貞一の日記.....

その母三

婦人と親族法.....

太田隆東三

子供の健康と栄養.....

元

子供を繪にお上げなさい.....

三九

そろもんの箴言.....

四

西洋料理筆記の一節.....

石井泰次郎

四一

女學生と小説.....

四二

海水浴につきての注意.....

四四

結婚に關する新説.....

四五

幼兒の衛生につきて二つ三つ.....

四七

子供の泣き方につきて.....

四八

俳句端書募集.....

四九

短歌募集.....

五〇

平和.....

みどり短歌會 眞宮起雲 兒

讀書の榮.....

四九

家庭 教育繪はなし○なぐさめ草○軍人慰問○親鸞聖人

## 保育者のため

遊戲につきて.....

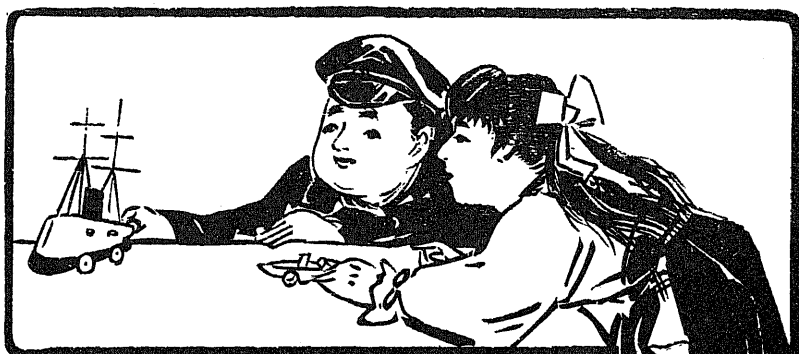
松本孝次郎 五二

東京便り.....

五九

## 會報

六一



# 婦人と子ども

第五卷第八號

小さい別嬪さん (つぎ)

おきな

一目見て慄へ上ったのも道理、  
出て来たものは、見るから恐ろ  
しい妖怪の様な大きな怪物でし  
た。

「何といふ恩知らずだらう。折

角己の御殿へ入れて生命を助けてやった恩も思はずに、何よりも大事にして居る薔薇を盗むとは何事だ、さあ、其罰には、今半時間もとぬ中に貴様の生命を取ってやるから、そう思へ」

ろ　しい聲で、この妖獸が怒鳴りだしました。

お父さんは丸で氣も心も顛倒して仕舞って、ぼったりと其怪獸の脚下に平伏して

「お慈悲に、生命ばかりはお助けを願ひます、實は、家を出まする時分、一人の娘の折角頼みがありましたもんですから、つい何知らずこの薔薇を取りました譯で、決して惡氣ではござりませぬから、殿様、どうかお宥免を願ひます

といふと、怪獸は

「已<sup>おれ</sup>は殿様<sup>とらさま</sup>じゃ  
ない、こゝに棲<sup>すま</sup>  
んでる怪獸<sup>けたいも</sup>なん  
だよ、そんな甘<sup>うま</sup>  
いお世辭<sup>せじ</sup>をいっ  
たつて、其<sup>その</sup>煽動<sup>おだて</sup>  
には乗<sup>の</sup>らないよ。  
所で今<sup>いま</sup>聞<sup>き</sup>けばお  
前<sup>まへ</sup>の家<sup>うち</sup>には娘<sup>むすめ</sup>が  
居<sup>ゐ</sup>るといつたね、  
そんなに生命<sup>いのち</sup>が



惜<sup>お</sup>しいのなら、  
其<sup>その</sup>娘<sup>むすめ</sup>の中誰<sup>だれ</sup>か一<sup>ひと</sup>  
人お前<sup>まへ</sup>の身代<sup>みしろ</sup>は  
りとしてこゝに  
贈<sup>く</sup>せば、夫<sup>それ</sup>でお  
前<sup>まへ</sup>の生命<sup>いのち</sup>丈<sup>だけ</sup>けは  
助<sup>たす</sup>けてやらう、  
夫<sup>それ</sup>が出来<sup>でき</sup>なかつ  
たなら、三月<sup>みづき</sup>た  
つてから、お前<sup>まへ</sup>  
自分でこゝへ殺<sup>ころ</sup>

されに來ねばならぬ、夫を確と約束すれば、此場丈けは見逃してやる」

もとよりお父さんは、可愛い娘を自分の身代りとして殺されにこそす氣はありませんが、兎に角今約束して置けばも一度家に歸つて、娘どもの顔も見られるからといふので、思ひ切つて、その事を約束しました。すると、怪獸は又何處へとなく行つて仕舞いました。

夫から、お父さんは大急ぎで支度してこの恐ろしいお城を後に見て、馬を急がせて山道を出て参りましたが、やがて、何時間かかゝつて、とうくお家へ歸りました。

所が、待ち兼ねて居た三人の娘さん達は、大喜びで奥から駈つて

出て三方から、お父さんにすがりついて來ました、併しお父さんは、娘等の顔を見る勇氣もない位、胸ははりさける様、目には涙が一杯たまって居ます。娘さん達はこの有様を見て、どうした事かと心配と不思議とお父さんのお顔を見つめて居ます、やがてお父さんは

「あゝお氣の毒だが、姉さん達にはお土産が出来なかつたよ」といって、船が都合よく行かなかつた事を咄して、そして彼の蓋をとり出して、

「さあ嬪別さん、これがお前のお土産だ、然し、このお土産、お父さんに取ってどれ丈け高い代價に付いてるか知れないんだよ」といって、彼の怪獸のお城でのお話を残らずして聞かせました。



其話を聞いて二人の姉さん達は、はらくと涙を流して、これといふのも、妹娘が、つまらない薔薇なんかを注文したからで、其爲めに、お父さんが殺されるといふ事になったんだ、といって、ひどく妹を攻撃して、

「夫にまあ御覧よ、自分の故で、お父さんにこんな難儀をかけて置きながら、涙一滴もこぼさないんだもの、何といふ親不孝なんでせう」

といって居ますと、妹は、

「いーえ 姉さん御心配下さらなくても宜いのですよ、私はもう、ちゃんと決心して居ます、怪獣は、吾々の中の一人を身代りによこせば お父さんの生命を助けてやるといったといふじゃありません

せんか、だから、私は今から直いって、お父さんの身代りに立つ積りなんですよ

判然といったなり涙一滴もこぼしません。お父さんは、これを聞いて

「いや／＼それは不可ないよ、私はどうしても、年の若いお前方を殺させることはしない、私こそもう年考て、この前何程も生きて居れないんだから、なあに、四五年も早く死ぬ積りで、殺されに行かうよ、どうして、可愛相に、お前方をやれるものか  
「いーえお父さん 卿若し其處へおいでになりや、私屹度後からついて行きますわ、私年が行ってないたって、生命なんか、もう要らないんですもの、其上、お父さんが死なった悲歎の爲め

に死ぬよりか、いっそ一思ひに殺される方がどの位樂か知れない  
八  
んですもの

お父さんは、いろ／＼言葉を盡して言つて聞かせましたが、小さい  
い別嬪さんは、どこまでも強情はって聞きません、處で、二人の  
姉さん達は、心の中では結局喜んで居ります、つね／＼妹が皆か  
ら可愛がられて居るのを嫉んで居ますので、

夫でお父さんもう／＼お仕舞には我を折つて、妹娘の言ふこと  
を聞き入れることになつて、そこで妹は、お父さんの身代はりに  
たつて、お城へ行くことに決りました。

待ては僅一日でも一年の様に長く思れるけれども、こんな時には  
月日は譯もなく早いもので、其中にもう約束の三月が経つて仕舞

ひました。それで、是非なく仕度をしてお父さんは妹娘をつれて、お城へ出かけることになりました。いよく出立といふ日になりました。すると、憎いじゃありませんか、姉さん達は、兩方の目からしをすりこんで、夫で無理に涙を出して、おい／＼と聲許り眞實に出して泣いて居ます。しかし、妹娘は決して泣いては居ないで

「夫では姉さん御機嫌よう」

と立派にお違乞をして、家を出ました。

やがて何時間かかゝって、とう／＼彼の怪獸のお城へ着きました。お父さんは、丸で地獄に這入る様な心地で、娘の手をひきながら、勝手を知って居ますから、ずん／＼廊下を通って、大廣間に這入りますと、此處には、ちゃんと、二人前の御膳の用意が出来て居

ります。併しお父さんはもう、胸が一杯で、何も食<sup>た</sup>べる氣にも

なれません、別嬪<sup>べっぴん</sup>さんも悲しいには違<sup>ちが</sup>ひありませんが、態<sup>わざ</sup>と夫<sup>それ</sup>を隠<sup>かく</sup>

して何事<sup>なにごと</sup>もはきくとやってのけて、反<sup>かへ</sup>つてお父<sup>とう</sup>さんを勞<sup>いた</sup>はつて

助<sup>たす</sup>けて居<sup>ゐ</sup>ます、そして、平氣<sup>へいき</sup>で御膳<sup>おせん</sup>に向<sup>むか</sup>ひますと、さまぐの御<sup>ご</sup>

馳走<sup>ちそう</sup>やお料理<sup>りょうり</sup>が<sup>で</sup>出<sup>で</sup>て居<sup>ゐ</sup>りますから、心<sup>こころ</sup>の中<sup>うち</sup>では、

「これは私<sup>わたし</sup>を食<sup>た</sup>べる前<sup>まへ</sup>に、十分私<sup>じゅうぶんわたし</sup>の身<sup>からだ</sup>體<sup>たい</sup>を肥<sup>こ</sup>やして置<sup>お</sup>かうといふ

怪獸<sup>けだもの</sup>の考<sup>かんが</sup>へと見<sup>み</sup>える

と今更<sup>いまさら</sup>の樣<sup>よう</sup>に恐<sup>おそ</sup>ろしくは思<sup>おも</sup>ひながらも、遠慮<sup>えんりょ</sup>なしに十分御馳走<sup>じゅうぶんおちそう</sup>に

なつて居<sup>ゐ</sup>ます。其<sup>その</sup>中<sup>うち</sup>に食<sup>しょく</sup>事<sup>じ</sup>が濟<sup>す</sup>みますと、何<sup>なに</sup>か知<sup>し</sup>らん奥<sup>おく</sup>の方<sup>はう</sup>で非<sup>ひ</sup>

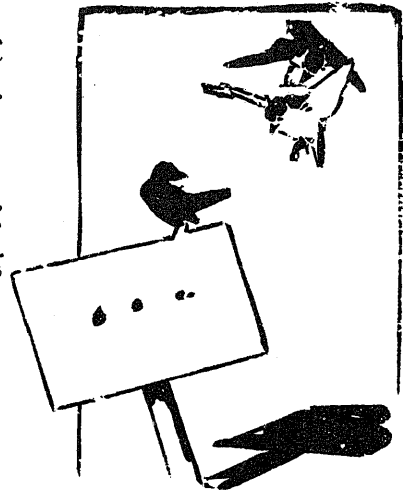
常<sup>じょう</sup>な物音<sup>ものおと</sup>がしました、これは彼<sup>か</sup>の怪獸<sup>けだもの</sup>の出<sup>で</sup>て來<sup>き</sup>た音<sup>おと</sup>でありますか

ら、お父<sup>とう</sup>さんは、涙<sup>なみだ</sup>ながらに娘<sup>むすめ</sup>に違<sup>いさ</sup>乞<sup>せき</sup>をして、この室<sup>むろ</sup>を出<sup>で</sup>て歸<sup>かへ</sup>つ

て行きますと、憫な娘はたった一人、この廣い寂しいお座敷に取り残されました。暫らくすると、どしんと大きな足音がしてこのお座敷に這入って來たのが、彼の怪しげな獸でありました。娘は其恐ろしい姿を一目見た丈で、氣を失ひ相になりましたが、もとから氣丈夫な性質ですから、ちーっと心を沈着けて、態と恐ろしさを隠して居ますと、怪獸は、のっそくと娘の方へ大股に歩いて寄って來ました。

(つゞく)

石屋の槌造



むかし／＼まづある處に石屋の槌造といふ男が居りました。石屋ですから、毎日／＼山へ行つては石を割つて賣り歩くのが商賣で、貧乏ではありませんが、正直によく動いて、僅かのお金を儲けては、楽しく其日を送つて居りました。

所が、この槌造の石を切り出す山には、一人の神様が住んで居て、人の云ふ事は何でも聞いて下さ

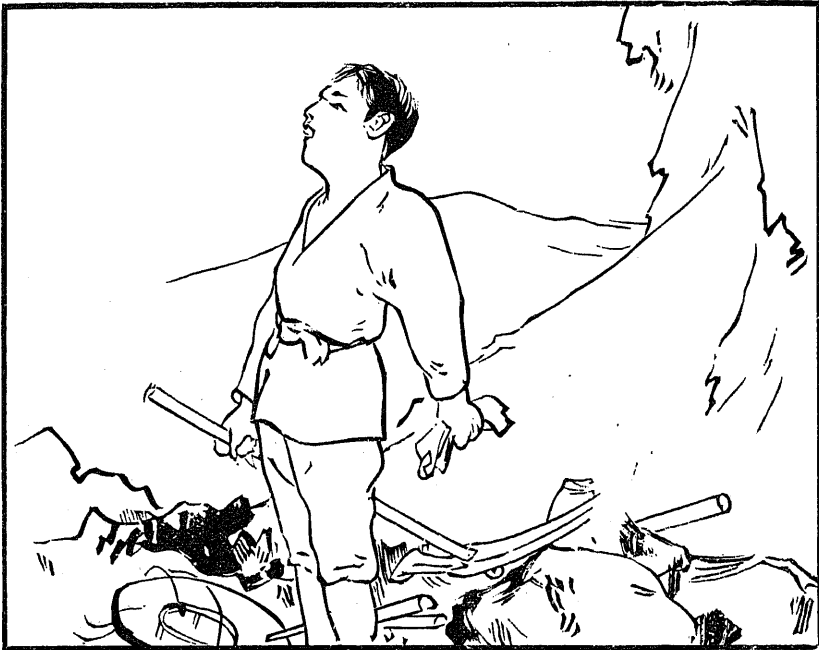
るといふ昔からの言傳があります。然し、槌造は、そんな馬鹿なことがあるものかといつて、決して眞實にはして居ませんでした。

所で、或日のこと、槌造は常日もの様に、この山から石を切り出して、それを或金持のお家へ持つて行きました。行つて見ますと、その金持のお家といふのは非常な立派なもので、槌造などが、とても今迄夢にも見た事もない位でした。それを見てから、槌造は、急に自分の今の家業がいやで／＼堪らなくなつて來て、山へ歸つて來てから、

「あゝあ、いやだ／＼こんな骨の折れる仕事は、もう／＼／＼といやになつて仕舞つた、どうかして、今日行つた様な、あんな立派なお金持になつて見たいものだ」

と、獨り言をいつて居ますと、不思議にも、山の

中から聲が聞こえて、  
 「お前の望を叶へてやら  
 う、今からお前はお金持  
 になる事が出来る」  
 槌造は不思議に思つて、  
 其邊を見廻はして見ま  
 たが、一向人影も見え  
 せん、で、槌造は、大方  
 これは自分の氣の故で、  
 そう聞こえたものだらう  
 と思つて、「何だ、馬鹿馬  
 鹿しい」と獨り言をいひ  
 ながら、何だか、今日は  
 もう仕事するの厭にな  
 つちやつたといふので、



ぼつ／＼道具を片付け  
 て、肩にひっかけながら、  
 家へ戻つて参りました。  
 所が、家へ戻つてから驚  
 いた、といふのは、もと  
 自分の住んで居た汚ない  
 小家は、何時の間にか、  
 夫は／＼立派なお邸にな  
 つて居る、家の具合から、  
 道具などの立派さから、  
 お座敷やお庭の風から、  
 丁度さつきからなりたい  
 と思つて居たお金持  
 の住居そっくり其儘にな  
 つてあります。喜ぶまい



ことか、槌造はこれを見て、丸で夢の様な心持になつて仕舞ひましたが、そんなり、今迄の、貧乏所帯の暮しであつたことはすっかり忘れて仕舞ひました。

所が、ある夏のこゝ、槌造は馬車に乗つて往來を行つて居りましたが、頭からお日さんの熱で照り附けられて堪らない程暑い、水を徹してもくちき乾いて仕舞ふ、槌造は、それを見て、

「はて、お日さんの力といふものは、豪いもんだな、已も一度お日さんになつて見たいもんじや」といつて居ますと、何處からとなく又山の神様の聲が聞こえて、

「それじや、お日さんにしてやらう」

といふかと思ふと、槌造は忽ちお日さんになつて仕舞ひました。

そこで、槌造は天に居て、しきりにそちらを照らし渡つて獨りで威張つて居りましたが、どうも毎日く同じ様なこと許りで積らないなと思つて來た矢先に、真黒い雲が一塊やつて來て、今までぴかりくと照つて居たお日さんを隠して仕舞ひました。お日さんは

「あゝ詰らんく、どうも雲の方がお日さんよりは、強い様だわい、已も一番今度は雲になりたいもんじや」

といひますと、又山の神さまの聲がして、

「夫では雲にしてやらう」

といふかと思ふと、槌造は又雲になつて仕舞ひました。そして、地面とお日さんとの中に立つて、毎日しきりと雨を降らして居りますと、さあ大變、そこいらの川々から大水が出て、家だの橋だのは、ど

んく壊はれて流されます、槌造は得意になつて  
「どうだい、雲の力は豪いもんだらう」

といつて、ひよいと見渡すと、何もかも壊れて流  
れて行く中に、吃として威張つて立つてるものは  
岩でした。夫を見て槌造は

「はてな、これで見ると已よりも岩の方がよほど  
力強いようじや、今度は一つ岩になりたいものじ  
や」

といひますと、其願が叶つて槌造は雲から岩に變  
りました。こんどこそは大丈夫、幾ら日か照らう  
が、雨が降らうが、已をぶち壊はすものは、天下  
が所も居ないわいと思つて、大威張りで立つて居  
ました。

んに、ある日、自分の脚下で、トツテン、トツテ  
ンと變な音がする、何か知らんと思つて、俯いて

見ると、一人の石屋が、大きな唐瓦で以て、しき  
りと岩をうちわつて居る。トツテンと音のする毎  
に、さしも大きな岩の破片が、がわら／＼とくづ  
れ落ちる、それを見て、槌造は

「こりや叶はん岩よりか、わんな人間の方が強い  
と見えるわい、己も今度は、人間になりたいな」  
といふて、又山の神さまの聲がして

「じや、も一度人間になるがよい」

といふかと思ふと、槌造は又元の石屋の槌造に歸  
りました。そして、夫からは、毎日／＼汗水になつ  
て石を切り出しに行きました、もう決して／＼  
何になりたいたいといふことも申しませんでしたか  
ら、山の神さまのお聲も聞こえないで、貧乏なが  
らも其日／＼を可白く暮らして行きましたとさ

めでたし／＼。

蛙になれ

むかし一人のけちんぼうが居りました、お女房さんにも知らせない様にして毎日錢を一錢二錢づゝ竹筒に入れては確りと口をして、押入れの奥に隠して置きました。夫でも、ひよつとかして、人に見付けられでもしては大變と思ひましたから、いつも錢を

人に見たら蛙になれ、已が見たら錢になれといつて口をして居りました。

すると、何時か女房さんが、其言つてゐる所を、そつと見付けました。そして丁度、お金の入用の時でしたから、けちばんの亭主が出て行つた後で、そつと、其竹筒の中から錢を悉皆取り出して仕舞ひましたが、平素から氣輕な性質でしたから、一番戲つてやらうと思つて、錢を取り出した後へ

蛙の子を一匹入れて、元の様にちやんと口をして置きました。

暫くすると、この亭主は外から歸つて来て、竹筒の中の錢がちやんとして居るかどかと思つて、一人で以てそつと口を取つて見た所が、思ひもよらず、蛙が一匹飛び出して來ましたので、

狼狽でまいことか「こりやく人違ひしてはいかぬ、おれじやないか」と申しましたとさ。

第五卷第六號懸賞考へ物

解答者及び受賞者披露

題

(1) 十六を三分して我國名 石見(五、八、三)

- (2) 二十を三分して我國名 因幡(五、七八)  
 (3) 九を二分して我國名 伊豫(五、四)  
 (4) 十三を二分して我國島名 佐渡(三、十)  
 (5) 二十三を三分して我國名 遠江(十、十、三)

解答者

◎第 壹番	東京市	増田しげ子
○第 貳番	東京市	宮邊富子
○第 參番	大坂市	吉田順
○第 四番	東京市	尺秀實
◎第 五番	名古屋	石川つね
◎第 六番	富山市	上野浪子
◎第 七番	山梨縣	篠原行惠
◎第 八番	甲斐縣	杉野義男
◎第 九番	能登	坂本タツ
◎第 拾番	三河	加納哲夫
◎第 十一番	大坂市	野田惠子
◎第 十二番	石川縣	濱田フユ
◎第 十三番	播磨	齋藤義夫
◎第 十四番	富山市	武田八重子
◎第 十五番	大坂市	松田とよ子
◎第 十六番	陸前國	松浦かめ子

◎第 十七番	水戸市	大森みえ
◎第 十八番	丹波國	森田みね子
◎第 十九番	東京市	稻葉美知子
◎第 二十番	佐賀縣	辻雪子
◎第 廿一番	伊豫國	大平忠通
◎第 廿二番	佐賀縣	南里のり
◎第 廿三番	長野縣	宮崎けさ子
◎第 廿四番	和歌山縣	上野てい子
◎第 廿五番	福島縣	佐藤俊雄
◎第 廿六番	長野縣	熊谷春男
◎第 廿七番	福島縣	椎名省子
◎第 廿八番	大坂市	吉田はた子
◎第 廿九番	備前國	藤原比奈
◎第 三十番	三河國	中條千鶴
◎第 卅一番	大坂市	矢野文子

右◎圈點の附けてある御方には「高等ふみのかき  
 ぶり壹部」と金五拾錢の小爲替證壹枚づつ

○圈點第參番第拾參番第廿參番第參拾壹番の御方  
 には雜誌壹部づつ

◎第七番第拾七番第廿七番の御方には日露讀本一

部づつ差し送りました。

景品金高六圓參拾六錢

内譯

金參圓五拾錢

金五拾錢小爲替證書七枚

金貳圓拾錢

文のかさぶり七部

金四拾錢

雜誌四部

金參拾六錢

日露戰爭讀本參部

外に景品送附料小爲替手数料金は皆様から戴いた郵券で拂ひました餘金はフレール會に寄附

いたしました

解答者が少く遺憾でありました然し景品は御

約束通りよりは多くいたしました解答してくだ

さつた御方様に厚く御禮申し上げます

以上

三河國西加茂郡筋生村字黒笹

近藤登喜子

狐と虎

十八

狐と虎と出遭つて、どつちが豪いといふ議論が始まりました。狐は「虎さん何といつたつて、僕の方が豪いよ、其證據を見せるから、今から、僕の後についてきてごらんさい、」といひますと、虎は「それじや一所に行つて見よう」といふので、狐の後について行きました。すると野山の獸どもは、四方八方に逃げ散つて行きます。狐は後向いて、虎さん、どうだ僕の威勢は豪いものだらう」といひますと、虎は「なる程」といつて感心しました。併し、皆の怖がつたのは、實は狐でなくて後について居た虎であつたのを虎自身では知らなかつたのです。

婦人と子ども



女の嗜

花や、茶の湯や、琴三絃や、料理に裁縫などは女の嗜として、親達は十分娘に仕込むことを怠りませぬ。若し個様な嗜がないとあつては、お嫁に行く時分に娘の面目に係はる。併しながら、其親達は、之よりもそつと大切な女の嗜の一つを見落して居り、且つお嫁を貰ふ方に取つても、夫を不問に置いて居るではありませんか、何でせうか、曰く育児の心を得させて置くことであります。

凡そ女の嗜といふ特殊のものがあつてしますれば、育児の心を得て置くほど女に取りて大切な嗜はありますまい、花だの茶の湯だの琴や三味は、たゞ其當座習つて居る丈の裝飾に過ぎません、お嫁に行

つてからが、實際そんな悠長なことに日を暮らして居る譯にも参りません、若し参りますとすれば、其時に習つても敢て差支はありますまい、裁縫は勿論必要な儘でせう、然しこれとても缺くべからざるものでもない、料理も心得て置くに越した事はない、然し家を持つてからでも特別のものは稽古が出来ます。己ひを得ずんば裁縫も料理も他人にさせて差支はありません、併し自分の子を育てるといふことになると、決して、其時になつて習ふといふのでは追付かぬ、よほど特別の事情がなくては人に托する事は出来ない。

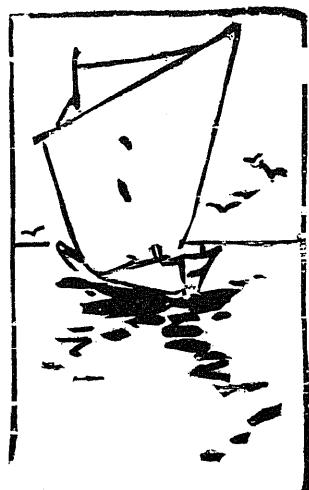
普通所謂女の 嬌といふものは、決して人間の生命や將來の運命に關するほど大切なものでないが、育兒と來ては人の生命に關する、即ち罷り間違へば子供の生命をなくするか、又は馬鹿にして仕舞ふ、こゝろ見ると、各自の母親がこの事を心得て置くに置かぬとは、直ちに自分や子供に直接の影響を來す許りでなく、抑々亦實に國家の利害盛衰に關係して來ることであり、所謂搖籃を動かす母の手は又世界を動かすといふではありませんか。

戦後國民の覺悟、就中日本女子の覺悟とは何でありませう、これは決して生花や、琴や三味や茶の湯や舞踏などに上達するに在るのではありません、實に、將來健全有爲な國民を作るに在ります、之に付ては、各自この有爲な國民を育て上げる育兒の法を十分に心得て置くことが、第一番に大切なことゝなるではありますまいか、併し此點に付きて、社會の親達殊に母親がたが、十分認識せられて居らんの

實に残念でありませんか、否なく所謂良妻賢母の養成を標榜して居る女學校に於てすら、怪しむべき程、この方の教授方が冷淡である、縦令、冷淡でないとしても當を得て居りませぬ、下宿屋住まいの女の先生が家政を教へると同じ様に、子供の経験もないか若い獨身の先生が育兒を講義して居られるのでありますから、よし女學校で學んだといつても到底眞の心得が得られるものでないのであります。私共は此點に付きて、大に世の母親さん方や、女學校の先生方に向つて注意を願ひたいのであります。







# 實驗上の育兒法

醫學博士

瀨川昌耆君講演

▲育兒智識の欠乏 育兒上のお咄しに入る前、特に親々方へ御注意致して置く事がある、先づ第一は育兒に對する智識の欠乏である、一旦女子が嫁入して母親となる前には小兒の育て方を是非一通り研究し置かなければならぬ、近來高等教育を授ける女學校では裁縫料理刺繡等の學課に重きを置

き卒業後夫れが實地に活用する、是れは誠に女子教育上善ばしい進歩であるが是等の女子が家庭を作り小兒を産けた場合になつて尙不自由を感じ差當り當惑する事の出来るのは育兒の智識欠乏である、シテ見ると育兒法は裁縫や料理の家政科と和並んで充分に修養する事は女子教育の實地問題として重きを措かなければなるまい、殊に今は古と違ひ社會は益々複雑で病氣などは昔し日本に名も聞かなかつたものが今では澤山流行するやうな時節だから、完全に哺育するには充分夫れに應ずる丈の智識を蓄へ置かなければならぬ、斯く育兒の智識を備へてすら小兒が産れて實地の場合に當ると修養した丈の智識ではまだナカク物足らず勝手の違うやうな事に澤山出逢うから、若し研究して置かなかつたら何んなに狼狽する事が生ずる

か知れない『子供は構はないでも自然に育つものだ』杯と野放しの獸物ではあるまいしソンの悠氣な事を云つて居ると飛んだ大間違ひを來し、不來にして病氣に陥つたとき、救助の小兒迄も殺して仕舞うやうな不惑な事になるから其の時悔んでもモ一間に合ひません

▲欠點多き育兒書 第二には育兒上の書物に欠點の多い事です、折角育兒の學問を修める場合に欠點のみ多い書物を見ては徒勞に屬する斗りでなく却つて夫れが爲め往々哺育上の弊害を惹起すに至る事がある、昔から古風な育兒衛生書は澤山あるが何分にも昔の智識で今日の育兒衛生には適當せず、又西洋の衛生育兒に關する書物を其儘翻譯されたものもあるが之れとても日本の育兒には適當しない箇所が澤山あるのです、一例を示せば西洋

では産湯をつかはせる時湯の溫度が非常に低く書いてあるが之れを直に日本の産湯の溫度に應用したら夫れこそ大變、スグに小兒が風邪を惹いて仕舞う、であるから日本人の育兒法は即ち日本で實驗の書物でなくてはならぬ、其の書物が欠乏し居るのは實に残念です

▲古來の弊習を打破せよ 第三は古來の習慣になつて居る育兒法を打破しなければ完全なる育兒の改良は出來ない、併し悲しい哉未だ今日では初産の婦人が子を産んでも何うして育て、宜いか無我無中です、夫れ故力と頼み、相談相手とするのは先づ姑さんで、何事も姑さんの經驗談に依らなければならぬが、若し姑が無ければ懇意な老婦人にも聞かなければならぬ、經驗談を聞くのは誠に結構なる事ではあるが、今日進歩せる醫學上から

見たら其の經驗談の中には随分無鐵砲な事實が澤山あつて冷々する様なことがあります夫れを能く鑑別もせず一から十まで經驗談に従ふと飛んだ間違ひを來す故此邊の見分けが肝腎です

▲舊産婆の弊習 第四は妊娠當時に於ける産婆の選擇です、今日では未だ舊式の産婆が澤山開業して居るし、熟練とか年功とか云ふ事を鼻に掛けて新教育を受けた産婆と拮抗しナカ／＼勢力を振つて居る、去れども舊式の産婆は唯胎兒を産ませるに止まつて同じ經驗でも學理に基いた根底がない夫れ故何うも産後の肥立ちを誤るとか、分娩期に消毒が行き届かぬとか又初生兒の取扱ひが悪く將來の健康に影響を迫ぼす事が多いとか、サマ／＼の弊害が伴はれて来る、是れでは大切なお産に臨んで妊婦が安心して一任する事が出来ないでは

ないか、私の見た處でも舊産婆の取揚方が悪いので完全に産れた小兒を臍帶の落し方や消毒法の届かぬ爲め、遂に治療が届かずムザ／＼殺して仕舞つた例が澤山ある、ソコへ往くと新教育を受けた産婆なら一般の産婆學に基いて順序よく適當の手當を施すから例令年齢は若くとも技術の上に確たる證據があつて舊産婆の熟練よりも年功よりも確かに産前産後の注意取扱ひ并に育兒上の良成績を認める事が出来る、産婆と育兒とは密接の關係を有する事故産婆を撰ぶには僅の事情に纏綿せず斷然新教育を受けた者に重きを置かなければならぬ

▲初生兒の時期 以上の四ヶ條は育兒上の關聯尤も密接である故著しき缺點を擧げて御注意致したのです、小兒の哺育は實に困難なことで充分に實

地經驗を積んでも又次ぎの小兒を育てる時には新しい事實が湧出で首を傾けて考へるやうな場合に接します、デ素より最愛の小兒の事故無事に機嫌克く發育すれば此様愉快なことはなく、夫れと反對に鬱悶がつて泣いて斗り居るとか、兎角病氣勝ちでいもあつたら親の身になると其の心配は一通りでありません、切愈々お約束の育兒談に入りますが先づ最初に初生兒の取扱方からお咄し致さう、一体小兒時代と云ふのは母親の胎内を出でしより十五六歳迄を云ふので、其の年齢に達する迄の間には色々身体の變化する時期がある、其の時期によつて小兒を區別されてあるし、従つて取扱法も違つて來るが、今茲に云ふ初生兒とは生れてから二週間迄位の間を申すので、即ち臍帶が落ちて跡の傷が癒ゆる迄を云ふのです、其間は丁度

二週間ばかりの時日を要するのである

▲妊婦の臨月と産科醫 初生兒取扱上注意の順序として妊婦が既に臨月に近づいたなら必ず熟練なる産科醫に診察を受ける事が尤も必要とする、母胎の胎兒が規則正しく發育して所謂普通のお産なら初産と雖も別に危険のあるべき筈はなく、安全に平産する事が出来るけれど萬一胎兒の居る場合等であつたら夫れこそ出産に臨んで轉倒苦惱しなければならぬから爾いふ事の豫防として必ず産前に産科醫を招くが宜い、爾うすれば万々一胎兒が轉倒し居つても夫れは居直りを直しくして愈々お産の時になつても安々と規則通りの出産をすることが出来る胎兒にも決して故障の起るものでない

▲小兒の健康診断 先づ恙なく胎兒が分娩したら産婆が万事の取扱法を心得て拔りなく指圖するの

が當前である併し出生の小兒は是非共小兒科の専門醫を招いて取敢ず身体検査を受ける事が第一の急務である、小兒の体外に顯れたる畸形なら一見して素人にも分る、即ち三ッ口だとか六ッ指だとか云ふ様な事なら直に見分けが付くので専門醫の診斷を乞はなければならぬが、若し爾ういふ不完全な部分が眼に觸ぬと多くは安心して醫師の診察を受けず其儘に過して無病息才な小兒と斷定して仕舞う、是れ大なる心得違ひで此一步を誤りし爲め遂に取返し付かぬ大事を惹起すやうになる、素人が等閑に附し誤解を來し易いのは小兒の体内に潜む先天性の疾患である其内でよく見受ける病氣は梅毒とか、鎖肛とか、心臟病とかで、爲めに小兒は衰弱し親々の眼にも夫れと心付く時に初めて醫師の診察を仰ぐ、此時薄弱なる小兒は往々取返

の付かぬ重患に陷ぬる事がある、斯んな騷をするより分娩當時専門醫の身体検査を受けて置く方が安心して育てられ、若し先天性の疾患があつても速に適當の治療を施す故後の憂ひを未然に防ぐことも出来るのですから、出生の小兒が身体検査を受けるのは妊婦が出産の時産婆を呼ぶのと同じ事に心得なければならぬ

▲育兒の日記 此の身体検査を受ける時には醫師の注意もあらうけれど尙親達が小兒發育上の參考として同時に小兒の体重、身長、及頭部と胸廓の周圍を精密に量り夫を記録し置のが必要である、それから生れた時の状態は何うであつたかと云ふ事も手落ちなく記して置くが宜い、其状態と云ふのは精密な程結構ですが忘れてはならぬ事として出産の状況、体重、身長、頭圍、胸圍身体特

徴、臍帶脱落并に其癰痕結成の時期、營養の方法（母乳、乳媼、生牛乳、煉牛乳固形食物を與へ始める時期）并其種類、齒の發生并に脱落の状況、起立歩行の時期、發語發話の時期、并其欠點其外一切の精神作用就中智識發達の順序より其特種なる點は必ず記すやうに仕なければならぬ、デハ一日と發育の模様も變化を生じて來るから毎日の事を細大洩さず記し置く時は其の小兒が將來の歴史として有益なる斗りでなく發育上の良否も一目瞭然故、發育不完全なる場合にも夫れを速に發見され、又醫師に相談する時にも夫れが有力なる參考となるから小兒を健全に哺育しやうと思ふなら必ず此日記を怠らず親達の我子に盡す當然の義務と心得なければならぬ

▲初生兒の健康なる特徴（一） 恙なく分娩した初

生兒が健康であるか無いかと云ふ特徴があるが夫が一見して素人に解るやうに説明致さう、先づ充分成熟した初生兒なら第一に泣聲が高い昔の書物に「産聲高く玉の如き男の子を擧た」杯と云事の書てあるが男に限らず女に限らず健全な小兒なら必ず高い聲で泣出すものだ、低い聲で優しい泣き方でもすると「マア此赤さんはお溫和しい事」杯と云ふ、夫れは素人の方の誤つたお世辭で、醫師から申せば先づ脆弱な小兒とより外思へない、夫れから第二には皮膚の色を御覽なさい、赤味を帯びて居る、赤子とはよく名を付けたものです、爾うして脂肪筋肉が緊満して居るのは健康な瑞相の一つである第三は頭髮が房々と密生して居し、第四は手足の爪が勢衰ないで充分に伸びて居る、丈夫な小兒は斯ういふ鹽梅に頭髮から爪に至る迄出產

當時から生々して居るのである

▲初生兒の健康なる特徴(二) 第五の健康な特徴は体重である、男の子なら二千九百グラム(凡そ我が七百八十三匁)より三千グラム(凡そ我が八百十匁)迄位です、若し之れが女の子なら男よりは目方が少し減じて二千八百グラム(凡そ我が七百五十六匁)内外です、第六は其の序に身長を量つて御覽なさい、男の子なら四十九センチメートル(凡そ我が曲尺一尺六寸二分位)女の子なら四十八センチメートル(凡そ我が曲尺一尺五寸八分位)あつたら充分です男女の目方や身の丈の違ふのは素より自然の理で別に怪むべき所はないが唯以上の如く申したら体重や身長が少ない初生兒は満足に育まいかと懸念するお方もあらうけれど併し之は育たないと云ふ譯は無のです、育て方にさ

へ充分氣を付けて遣れば随分健全に育つから念の爲め申添へて置きます、第七には頭部と胸隔の周圍の長さを量るに初生兒は必ず頭勝ちのものである即ち頭の周圍は三十三センチメートル(凡そ我が曲尺一尺九分位)が健康状態であるが夫れに準じて胸隔の周圍は三十一センチメートル(凡そ我が曲尺一尺二分位)迄位の長さのものである是等は男女其各著しい差は無い女子の方が二三分も短い位です、尙序に申して置くが其の小兒が健全に成育して一年の後半期に及べば頭部と胸隔の周圍の長さは平均するか、左もななくば頭圍より胸圍の方が大きいのが通例である、即ち胸の發育が頭の發育に打ち勝つのである、然るに夫れが反對で一年の後半期より二年に及んでもなは頭勝ちの儘で居る小兒がある、これは身体虚弱の徴候で身体

のどこにか病があるものであるからよく醫師に托して早く相當の處置を施さねばなりません

▲頭の格好 初生兒が母体を出た當時は頭の形が小兒によつて各異つて居る、通例は丸いものと定つて居るが、稍ともすれば細長い形があるし、又は平たくなつたりして居る、ダガ之れは心配にはならぬ、日を経るに従ひ細長い形も平つたのも次第に圓味が付いて普通の頭形に復するものである

▲顙門と骨の發育 初生兒の頭部を能く檢めて見ると前頭にビク／＼動いて居る處があります、之れを顙門と稱へ、俗に「ひよめき」と云ふがビク／＼して居たからとして異状のある譯ではない、未だ此の時期には頭蓋骨が閉ぢないのです、生後一年から二年の間には何時が此骨が閉ぢて仕舞う、

處で二ヶ年経つてもまだ顙門が閉ぢずに以前の儘に開けて居たら、夫れは骨の發育が不十分なる故速に小兒の専門醫に診察を受けて相當の手當を仕なければならぬ

▲青斑なる小兒 生れた時小兒の身体を檢査すると大抵は青斑と云つて青い色の班紋が臀部、腰部、背肩部等に存するのを見るであらう、此青斑は決して西洋の小兒には見ない、黄色人種に限つたものだが小兒の成長するに従ひ何時取れたとは無く自然に消滅して仕舞ひ跡を残さぬから之れは案じるに及ばぬ

▲西洋の産湯は不適當 是迄順序を立てゝお話し仕た育児上の注意は未だ胎兒の生れ落ちざる其の前に豫め親達の記憶し置かねばならぬ要件であるが妊婦が産氣を催ふして胎兒が母の体内を出ると



ソコで産婆が夫々規則正しく適當の處置をなすので、  
 扱之れからが愈々實地に手を下して保育する大切  
 な時期となるのである、産婆は生兒を取揚げ、臍  
 帶を切つて仕舞うと先づ産湯を行はせるが、其の  
 温度の事に就きお咄し仕て置きたい事がある、夫  
 れは西洋の育兒書等を其儘翻譯した書物の中には  
 日本人の育兒法に不適當な事が澤山記してあつて  
 既に産湯の温度等は全然日本古來の習慣にそむい  
 てゐるやうな低い温度を記載してある、即ち  
 西洋では攝氏三十五度位の産湯を行はせるが、  
 此の位の温度では日向水の少し温かい位のも  
 ので、手を其中へ入れて見ると却つて温いと云ふ  
 感じがなく湯とは思へないやうな微温である、西  
 洋人の習慣から考へれば之が適當なる温度であ  
 らう、何故ならば西洋では浴法が冷浴、温浴、熱

浴の三種あつて平生一般の温浴を取つて居る、其  
 の温度は三十五六度の處です、爾うして入浴する  
 にも垢を落して身体を清潔にし精神を爽快にする  
 のが目的であるが、斯ういふ習慣を直に日本人に  
 適用致さうと云ても日本には從來日本人に適應す  
 る入浴の習慣があつて俄に之れを打破する事は出來  
 ない、先づ日本人の入浴法は身体を清潔にし精神  
 を爽快ならしむる外に身体を温めると云ふ一種特  
 別の習慣がある、故に三十五六度の日向水のやう  
 な湯へ浴つたら忽ち感冒を惹くから、幾ら微温好  
 きの人でも三十九度以下では良い心持に温まれな  
 い、況して熱い湯好きでは四十三四度位を喜ぶ程  
 です

▲適當なる産湯の温度 斯ういふ熱い湯へ浴いり  
 習ちつた日本人の間へ生まれ赤子ではあるし、

且つは日本の家屋は西洋の家屋に比して誠に構造から不完全であるから室内の温度は動ともすると冷却する、此際母の温い体内を出た許りの初生児が西洋で用ゐる三十五六度位の微温な産湯を行はせたなら何うであらうか、少し手間取つたら忽ち血温(攝氏三十七度)よりも温度が下り、夏向きならまだしもよいが、寒中でいもあつたら赤子の身体は俄に冷却して再び元のやうに温めるには容易でない萬一温めやうでも不充分であつたら生力次第に弱つて取返しのかね一大事を醸すに至るであらう、故に日本で初生児に行はせる産湯は夏と冬とを斟酌して攝氏參拾八九度位の温度と定め、大人が其の湯へ手を入れたら丁度心持ちよく温かに感ずる位即ち熱からず、ぬるからずと云ふ度合ひとするが宜い、尙日本人が熱い湯へ浴る事に就

て衛生上矢笠しい説もあるが、私は寧ろ日本人の爲めには熱い湯の方が衛生上の利益ある事と信ずる其の理由は次回にお咄し致さう

貞一の日記(明治卅六年五月)(拔萃)

その母

明治三十八年四月廿四日 佐々木先生來診せられ食物平生の通に復してよろしと、牛乳は明朝より、二〇〇瓦に増すべしとなり。

四月廿五日

体温 朝 卅六度六分 晝 卅七度一分 夕

卅六度

夕食の折、安田さん、箸をもつて、喰べさせようとしたるに、箸をとりあげて、母に渡さんとし、受取らざりしかばひつくりかへりて泣く、

朝食 牛乳 二〇〇瓦 パン二切

晝食 粥一椀 魚肉十匁 牛乳 五〇瓦

かやつ 牛乳 一五〇瓦 パン二切

夕食 粥一椀 魚肉十匁 牛乳五〇瓦

四月廿七日 小原先生來診せらる、天氣よろしき

時は、もはや外に出ても宜しく、又四五日様子

を見て、異常なくば、湯に入れてもよしと、

今日はじめて、ヤー／＼といふ、安田さんと呼

ぶつもりとは、心づかぬ故、返事もせざりしに、

傍によりて、膝をゆすぶりて、答を促す様子故、

漸く心付きて、返事したれば、安心して止めた

り、

父さん 御歸になつたら、どうするのときけば、

手をつきて御辭儀す 母さん御歸りになつたら

ときけば、ヤン／＼といふ、幾度御辭儀するのと

いつてもイヤ／＼ヤン／＼といふ、これはい

つでも母がかへれば、嬉しくて泣くなり、

四月廿九日 始めてカー／＼とつゞけていふ、

元氣日に増し宜し、

五月一日 今日より、牛乳を一日、五〇〇瓦にす、

五月四日 トとテの間の音を出す、ガッ／＼

といふ 學校のつもりなるべし

五月七日 チヨウ／＼、ポー／＼ といふ、安田

さんがぬひ物をして居るのを見て、手眞似を

なす

五月八日 コン／＼（ピアノ）で何をひくのとさけ

ば、チヨウ／＼といふ、まだ何をひくのととへ

ば クワツ／＼（御池の蛙は）といふ

五月九日 千葉より 曾祖母の君いらせらる、真

一は見なれぬ年奇なれど、直ちに膝にかけ上り

抱いだかれたり、又ヨイシヨとかけをゑして、相撲すもうをとりに行く、

五月十日 此頃父が座敷の短冊たんずくはさみの前に行

き 東久世伯の 戈はことりて月見る夜牛になく雁かり

の聲雲井まできこえるかなといふ歌、落合直

文氏の たらちねの杖つえにとおもふ我ために一も

とゆるせ庭にはのたかむら といふ歌を 朗讀ちやうどくせし

に其後 毎日父母 または安田さんを促うながして、其

前にたゝせよめくといふ、たらちねといへば

その方の短冊を指し 戈はことりてと、よめば其の

短冊を指す、其後ビヤノの室に拳舒夜雨青山巖

心吐春風碧樹花 といふ軸と 屏風のはりませ

の中に 東風さそふ朝やこがねの花しづくとい

ふ俳句ありしを、これも何時かきゝおぼえて、

それゝに指さす、

五月十一日 牛乳を百瓦増す 即ち

朝食 パン 牛乳 二〇〇瓦

晝食 粥 全 一〇〇瓦

ふやつパン 全 二〇〇瓦

夕食 粥 全 一〇〇瓦

五月十三日 香の物をコーコ、下駄をカツコ、靴

をクツクといふ、わざゝ教へしにわらず、何

時かきゝおぼえたるなり、今日より貞ちゃん

御友達として、子供四匹をつれたる カナリヤ

が家族に加はる、

安田氏と父につれられ、青年會館の音樂會に行

く、コチロンの舞踏あり きゝなれし曲とて、

得意氣とくいけによるこぶ

小原先生に行き 体量を計りて頂く

九六五〇〇、瓦ありき

五月十四日 午後より父母安田さんと皆つれだ

ち 日比谷公園に行く、芝生の上にてよろこび  
かけまわりて、遊び居りしが 書生の一群 芝  
生の上に まとゐして琵琶歌を うたひつゝあ  
りしを ふと見つけておのれもそこに座りて聽  
き居りしが、家にかへらんと、手を引きたつれ  
ど中々たゝず、イヤ〜といつては、草をむし  
る、

手拭をテンテ 箸をはしといふ、

五月十五日 此頃云ひ得ることは

バ(麵麩) ジャー(飲料) オト、(魚) アジ  
(鰻) ハシ(箸) コーコ(香物) フ(麩) マン  
マ(食物の總稱) ヤー(安田さん) カー(母)  
トー(父) ババ(老婢) バツバ(煙草) ダイ  
(食卓) アツカ(ランプ) テ、(手) アシ又ハ

アンヨ(足) タータ(足袋) 又アツカタタータと

いふ事よりアツカともいふ クク(靴) バツチ

(汚き物) コン〜(ピアノ) カツコ(下駄) テ

フテフ ガツコー(學校) エン(遠方)

以上名詞

ワン〜(犬) ニヤン〜(猫) ヒン〜(馬)

モー(牛) チユウ〜(雀) ガー(鳥) ボー

(瀛鐘車) ゴー(電車) シユツ〜(瀛車) ガ

ー〜(車) プツプツ(兵隊) アーウー(豆腐

屋) ヤン〜(自分の泣き聲) チー(父の叱る

メーといふ聲) ブク〜 以上自然語

五月十七日アツチ(方角) ジャイ(イタイ時)コワ

レタ時) などいふ桃太郎さんの御話とて、おち

いさんはといへば エン〜 おばあさんは

ウンウ(オシメを洗ふ事) 赤い實はと きけば

ぶくく〜と答へ 赤ちゃん(もい)桃太郎(もい)の事(こと)はとい

へば

ヤンヤ〜といふ、

氣に入らぬ事ありて、泣く時はわざ〜、グリ

ヤ〜といふ

五月十八日 この頃は、人の言ふ事を、大抵は真

似し得る様になりたり、そして何か、分らぬ事

を、ウヂヤ〜云つて居る、言語收得の能力、

漸く盛に、活動し来る頃と覺ゆ、

ビヤノ弾く手付 頗る甘し、

五月十九日 貞ちゃん居ないよといへば「オツタ

〜」といつて顔をさし出して来る、これは父の

語を眞似るなり

## 婦人と親族法

太田 英 隆

### 第二節 戸主及家族の權利義務

#### 第一項 戸主の權利

戸主と家族との關係は、族長又は家長が、その部下に對せる關係の進化したものに外ありません。

太古に於きましては、族長とか家長とか云ふものは、その權利が廣くて生殺與奪は、意の欲する儘

でありました、段々世が進むに従つて、之等の

權は全く變じて、家長權は親權となりました。さ

うして、我民法では、戸主の權利として認むるも

のは左の如くであります。

(一) 家の氏を稱するの權、氏と云ふのは皆さん

御承知の通り、家を明かに表はす記號でありま

して、自分の家と他人の家とを區別する標準で

(二)

あります。歴史を見ますと、中世に於いて、平民には苗字を許さないのを原則としてゐたことがありますが、明治三年九月には、布告を以て一般に許すことにしましたから、今は苗字は皆あります。民法にもこの規定があつて、同一の家に在るものは、全じ氏を稱へることにしてあります。それでありますから、妻でも生家の氏を稱せないで、夫の氏を稱へなければなりません。氏の使用權は、各個人に屬するものですから、他人が之れを冒せば、損害賠償の訴を起すことが出来ます。獨逸の民法などには、之を停止又は廢止する訴を起す規定があるのです。

所屬不明の財産を取得するの權、

戸主と家族とは、通常一家に同居するものでありますから、その内家族の財産だか戸主のも

のだから不明なときは、法律は之れを戸主の財産と推定するのです。

(三)

家族の居所を指定するの權、戸主にこの權利を與へたのは、固と一家の整理上から來たのですから、絶對的ではなく、家政整理上必要な範圍内で行使せなければなりません。

右の原則により、家族が戸主の指定した居所に居ない時は、戸主は左の制裁を加ふことが出来ます。

(イ) その家族を扶養せなくてもよいのです。  
(ロ) その家族を勘當即ち離籍してよいのです。

しかし、未成年者は離籍することは出来ません。

(四) (五)

家族の婚姻又は養子縁組に同意を爲すの權、家族の入籍又は轉籍に同意を爲すの權、

(六) 家族が他家を相続し分家を爲し又は廢絶したる本家分家同家其他親族の家を再興するに同意を爲すの權、

(七) 家族の禁治產準禁治產の宣告を請求し又は其宣告の取消を請求するの權、

(八) 後見人と爲るの權、

(九) 親族會を招集するの權及び親族會に意見を陳述するの權、

(十) 家督相續人を指定するの權、

以上は戸主の權利にして、家族を監督するものでありますから、完全な能力を有する者でなければなりません、それで、戸主が未成年であつたならば、戸主に親權を行ふ者か、又は後見人が代り、そうして戸主が禁治產者であるならば、後見人が之れを行ふのであります。

## 第二項 戸主の義務

戸主が家族に對しての義務は、扶養の義務であります。若し戸主が、この扶養の義務に違つたら、刑法上の制裁を受けることになつてゐます。又華族は、其學齡兒童の就學を怠つた時には、宮中の禮遇を停止されます。さうしてこの扶養の義務は、後に別に章を設けて詳しく述べますから、こゝには略します。

## 第三項 家族の權利

(一) 其家の氏を稱するの權、之れは、戸主の時に述べたと同じ理由であります。

(二) 財産を特有するの權、公債證券株券の如き自分の名に於て得た財産は、家族の特有財産とするのであります。

(三) 扶養を受けるの權、



#### 第四項 家族の義務

家族の義務は、戸主權に服従し、其身上の進退に關し戸主の同意を得るのが主でありまして、之れは別に述べる必要がありません。

#### 第三節 戸主權の消滅

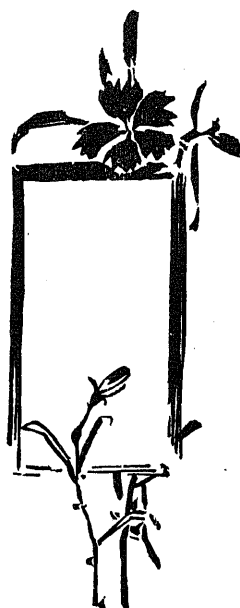
##### 第一款 死亡に因る消滅

死亡が戸主權消滅の自然的原因となる事は、誰が見ても見易いことであります。法律は、實際死亡せなくても、死亡したと云ふ推定が附けばそれで戸主權消滅の原因とすることがあります。之れはどんな場合かと云へば、ある期間生死が知れないときに、失踪の宣告をした時であります。しかし、之れは實際死亡したものではありませんから、若し途中で死な、い事が分れば、取消の効力は既に往に溯つて、元の身分に復するのであります。

#### 小兒の健康と菜食

三十八

三島博士の説に由れば、野菜類を好む子供は胃の弱き虚弱の子供に多し、元來野菜は魚肉、牛肉に比すれば滋養少き上に消化も宜しからず、故に胃の丈夫の子供が自然に野菜を好み相に思はるれども、事實は全く反對にして前述の如きは、例へば大人に在りても胃病持ちは、滋養のある肉食類よりは反つて茶漬に漬物の淡泊にして、併も消化よからず滋養少きものを好むが如し、而して、これを好むに由りて益々胃を悪くするものなり。故に子供にても野菜のみを好んで、肉類を嫌ふ傾のものは、これがために遂に營養不足の爲め虚弱に陥るべし。されば、注意して魚肉牛肉の如きものを淡泊に料理して食べさせる様にすべきなりと、



子供に繪をお上げなさい

日向志

玩具の種類はさまざまありますが、子供の飽かないといふ玩具と申すと、まことに少いので困ります。宅でも、随分いろんな玩具を興へて見ましたが、其中で一番長く續いて興味を持つて居りましたのは、電車と汽車（客車や貨車を幾つもの）聯ねるので、獨りで動く様にはなつて居ないものでした。尤も年齢は僅か三歳ですが、其他のは、ほんの一時か半時、夫ともほんの見た瞬間だけに

留つて其後は一向見向きもしません。

電車と汽車の他に、餘程氣に入つて居るものが

一つあります。夫は繪の本であります。一つは

動物、獅子や虎や象や馬などを一枚毎に色刷りに

して畫いて居ますので、他のは桃太郎さんのお話

の繪であります。これが大層氣に入りまして、動

物の名前などは、一つ／＼覺えるとはなしに覺え

て行つて、一枚／＼開けて見れば、一々その名前

を言ひ當てるのが、この上もなく面白い様に見え

て居ります。

こんな風ですから、子供の發達に相當した繪を選

んで子供に與へますれば、子供に取つては大層結

構な玩具となります上に、他の玩具から比べて見

て又多少異つた効能もあります。そこで、どんな

繪が宜しいかといひますと、小さい子供には、子

供の平素知つて居るものを描いてるのが、宜しいので、其中でも、犬とか猫とか馬とか鶏とか、雀鳥とかいふ様なよく知つた動物などが宜しいので、子供は美しい繪の中に自分の知つて居る面白がつて居るものを見附けるのが何よりも面白いのであります。尤も多少成長くなつた子供ですと、平素見れない虎や狼や獅子や、駱駝といふ様なのを繪で見るといふことが面白くなつて來るのであります。其他にも考へますれば、いろ／＼面白くつて、子供の爲になる畫題もあるのですが、我國では、他の玩具の發達して居ない様に、子供の爲の繪といふものが、まことに發達して居りませんので、これは、一つは印刷がまだ十分甘くないからで、いからでもあります、又一つは親達が其方にまだ考へ及ばさない爲でもあります。今日の處で

は、縁日や小さい雜誌屋の店頭などに曝らされて居る様な子供の爲めの繪本は、畫題から、書き振から、印刷などが、まことに不味許りでなく、色なぞと來ますと、とても顔向けのならない様な俗惡なものなどがありまして、少し見られる様なのは、品物の割合に價が馬鹿に高いのですから、どうかして、都合の宜い子供の繪が出來て欲しいものだと思ひます。尤も大阪には、こんな目的から、「子ども」といふ繪の雜誌がある相で、東京でも「繪ばなし」といふのが出來ました、讀書の槩參照)一寸見た所では、大分氣を付けてこしらへて居る様で、代價も品物から比べて決して高くはありませぬ、まだ一號と二號としか見ませぬが、段々材料などを注意して精選して行きますれば、先づ吾々の望に沿ふ様なものになりませう。

そろもんの箴言

柔和なる答は憤恨をといめ厲しき言葉は怒を激す

蔬菜を食ひて互に愛するは肥たる牛を食

ひて互に恨むるに愈る。

憤はり易きものは争端を起し、怒をおそ

くするものは争端をといむ。

怒をおそくするものは大なる知識あり、

氣の短きものは愚なることを顯はす。

心の安穩なるものは身のいのちなり、娼

嫉は骨の腐なり。

知慧ある婦はその家をたて、愚なる婦は

其手をもてこれを毀つ、

その口を守るものは其生命を守る、その

口唇を大きく開くものには滅亡来る。

鞭を加えざるものは、其子を惡むなり、  
子を愛するものはしきりに之をいましむ。

西洋料理筆記の一節

石井泰次郎

筆記のよしあしは、よみてつくりて、出来れば  
よしとし、出来ねばあしとするのである、それ  
だからよしあしは實習する者の巧拙にはよらな  
いといつてもよろしい、

●シリツプスオムレツの拵方

原料割合

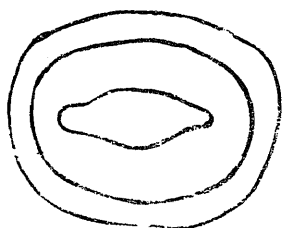
鹽	洋	海	雞
	芹	老	卵
		芝	
		海	
		老	
五	五	八	二
分	分	分	個

胡椒粉

五分

中皿の中へ、鶏卵二ツを割入れて、バセリを洗ひて、葉ばかりをきざみて、布巾に包みてしばらく、出して皿に入れバラ／＼にときて、それを入れ、次に芝海老を十二ほど入れ『海老は小海老にて十二にて八匁位のものなり、他の海老にてもよし』其上に鹽と胡椒とを入れ、箸にて掻めぐらして、フライ鍋にラード油を入れて溶して、溶たるを他の器にうつして、其あとの、鍋につきたるを、玉子まゝに火にかきて、玉子を入るべし、さて箸にて掻まぜて、向の方へと包みかくるやうによせて、左の手にて、フライ鍋の柄先を持て、右の手をに

(7)



まゝに火にかきて、玉子を入るべし、さて箸にて掻まぜて、向の方へと包みかくるやうによせて、左の手にて、フライ鍋の柄先を持て、右の手をに

ぎりて、其柄のつきぎはを、とんとうちて、内のを打かへし、又打かへして、皿を上にあて、鍋をかへして、皿にうつし入るべし

これはシリツプスオムレット

略製なりとぞ、

●ビーフカツレットの拵方

原料割合

牛肉 ロース肉 二

鹽 六

胡椒粉 六

メリケン粉 二

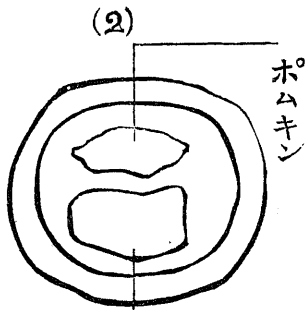
鶏卵 三

パン粉 三

ラード 一

ロース肉を二寸に二寸五分、あつさ五分位に切る(筋を切るやうに心がくべし)さて夫を板の上に

ピンなどにて強く打柔らげて、鹽と胡椒粉を片面だけへ振かけ、手のひらにてとん／＼打こみあき、次にメリケン粉の中に入れ、能く粉をつけて、鶏卵のときたる中へ浸して、左の手の指にてつりあげ、右の手に箸を持って、肉よりたるゝ玉子をこき、バシ粉の中に入れて、よくつけて、のこらず拵へたる上にて、鍋にラード油を煮立てゝ、其中に入れて、『あまり一度に入れてはあしし』強き火上にて箸にてかへしかへしてあぐべし、あげたるを洋紙の上にて取油を切りかくべし、四つ五つを一度をあげて、其後なべを再びかけて、油の煮立つ時に次のを入るべし、かくして五分間づゝにて取上るなり、これを皿にもり、そへものをつくる、時のものとしてこゝには南瓜をそへたり、



●ホムブキン、マーシの拵方  
右にそへる物の拵方は、南瓜を鹽をつけて、水にて洗ひて、たてにい／＼切て、皮をむき、たねをくりとりて、しほ湯に入れて、湯煮して、箆にあげ、水氣を去りて、馬尾篩にて裏漉して、鍋に入れ、バタを加へ火にかけ煉りて、其後鹽と胡椒入れて、二分間ねる  
此割合は左の如し

ホムキン  
南瓜 三百匁  
バタ 十五匁  
カクレツ鹽 一匁  
胡椒粉 一匁

女學生と小説

澤柳局長談話の一節

今日の女學生をして健全なる教育を受けしめんには、卑猥なる小説を好讀する風を禁止せざるべからず、歐米諸國に於ては有名な小説の筋書位は之を知らざれば恥辱と爲すが如き風あり、我國と雖も高尚なる小説ならば之を愛讀するも不可なしと雖も、彼の卑猥なる小説を喜ぶが如きは甚だ不可なり、聞く所に依れば女學生の文章が古の文体より一變して現時の文体に接近し來る傾向ある中に、其文章及び言語の間に卑猥なる小説の言辭を用ふる所少なからず、此等は尙も深く注意せざるべからず、要するに一方に卑猥なる小説を製作せざる様動むべきも、亦社會の制裁を高め學生をして卑猥なる小説を手にすることを恥辱と爲すの風を養成せざるべからず、此等は獨り女學生のみならず、男學生も又同様なりとす。

海水浴につきての注意

海に山に暑さを避くる、今日此頃、海水浴に付きての注意も時節柄、必要と思ひつれば、左に掲ぐ  
▲海水浴場の撰擇 療病と保養とに論なく、海水の浴を採らんと欲する者は、先づ其浴場を撰擇せ

四十四

ざる可らず、浴場の撰擇とは、天然の風光、人工の設備、氣候の現象等を檢して、先之が適否を案じ、扱て又海邊と海底の土砂が清潔なりや否や、交流は容易なりや否やを致へ、且遠淺の所を擇ぶことなり、

▲海水浴者の心得(一)海水浴の時期は毎年七月より九月迄の三ヶ月間とす(二)持續日數は体力の強弱、年齢の幼長により多少の加減あれども、平均三週乃至五週間とすべし(三)度數は虛弱者、病者は最初二日乃至三日に一回之を行ひ漸次毎日一回に改むべく、其健者と雖も一日二回を超ゆるは宜しからず(四)時間は游泳を知らざる者及び虛弱者病者等は三分乃至五分にして健康者及び游泳者といへど卅分以上に亘るは有害なり(五)浴時は病者及び虛弱者は氣溫の餘り下降せざる午後五時前後、

健康者は日出後一二時間を経たる午前（せん）の七八時頃とす（六）浴前（よくぜん）先づ布片（ぬのきれ）を海水（かいすい）に浸（ひた）して全身（ぜんしん）を摩擦（まさつ）し事終りて後徐に浴（よく）を採るべし脱衣後直ちに水中に入らば皮膚（ひふ）の表面著しく收縮（しうしゆく）して血液内部に集注（しゆ）し不慮（ふりょ）の禍（わざはひ）を來たすことあり（七）浴中（よくちゆう）虚弱者及び病者は決して頭部（たうぶ）を海水（かいすい）に浸（ひた）す可らず且つ數回海面に向ひて深呼吸（しんとくきう）をなし肺臟（はいさう）の強健（きやうけん）を助くることを心掛くべし（八）游泳（ゆうえい）を知らざる者は必らず水中にて手足の運動（うんどう）をなすに努めよ（九）出浴前二三回海水の含嗽（くわくさく）をなすべし之れ口腔粘膜（かうかうねんまく）を強健にするの効あり（十）浴後には乾燥（かんぼう）せる布片（ぬのきれ）もて強く身体（しん）の全部（ぜんぶ）を摩擦（まさつ）し充分（じゆうぶん）に水分（すいぶん）を拭去りて後着衣（のちちやくい）すべきなり（十一）着衣（ちやくい）後は必らず十五分間海邊を逍遙（せうせう）して適宜（てきぎ）の運動（うんどう）をなすべし（十二）食後直ちに浴と採る可らず是れ時に痙攣（けいれん）を誘起（ゆうき）し又消化（しょう化）を妨ぐ

るものなればなり（十三）雨天及風波激しき時には決して浴（よく）す可らず非常に健康（けんかう）を害するをあり（東京日々）

### 結婚に關する新説

獨逸の精神病學泰斗博士（たうはくし）バイエル氏は新に説をなして曰へらく、結婚は男性にとりてこそ有利なれ、女性には生理學上之と反對の結果を生ずべし、何となれば男性の精神病者に獨身の人多けれど、女性の獨身者には殆んどこの精神病に罹れるものあるを見ず、此の一事を以てしても、女子に結婚は不利なるを證すべく、殊にヒステリーの患者は概ね其早婚に原因を有すれば大に注意せざる可らず云々と果して眞なりや否やを知らず。

### 幼兒衛生につきて二つ三つ

第一。熱い湯に入れることは悪いです。また長湯をさすことも禁物です、なぜかといふと、かゝる事は、心臓の働きを早めるものですから、その反動に、すつかり疲勞を感じさしますので、要るところ、心臓を弱めて血の循環を悪くします。



第二。小兒を抱いたり負ふたりして、強く身體を動かすとか、又は疾く走るとかするとも、亦た矢張り第一と同じ結果を生じます、乳母車にのせて、石ころ道も構はずに、がたびしと押しあくるのも甚だ悪いのです。

第三。ワツと云ふて顔を出したりなど、突然に小兒を驚かすことはいけません、頭腦にこたへる様な音響をさかすことも同前です、かゝることは、大人ですらも、吃驚して心臓の鼓動がたかまります、況して小兒には、一層甚しく影響します、然して其結果は、やはり血のめぐることに變動を與へるものです。

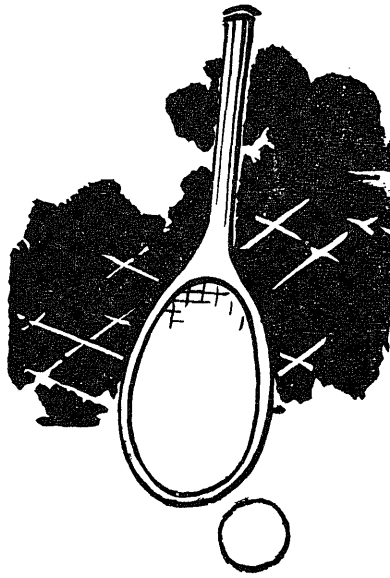
第四。氣候のことも注意してやらねばなりません、極暑に逢ひますと、血行が早くなり、極寒にうたれると、反對に鈍くなり、だから氣候の急變

に氣をつけて、よく兒童を保護してやらなければなりません、血行がおそくなると、兎角風邪に罹るもので、通常一般の風邪ひきは、厚着を急に薄くするなど、皮膚の血行が平均を失ふためである。

第五。身體の或部を壓迫すること、亦た血の循環をにぶく致します、無暗に帶をかたく結んだり、又は、兒を背負ふときに、負紐でもつて臀のあたりを緊縛し、兩脚をぶら／＼しておくなど、甚だ悪い。そして此の弊は小兒を寢さすのに、常に同じ片側ばかり下にさす場合にも起るのです。

#### 子供の泣き方に就いて

- (一)眼をあき、涙を澤山だして、泣くのは、からだに、いたみ所のある時がおなかのいたい時であります。
- (二)眼をあき、涙を少々出して、泣くのは、背負はれるに、あきたのか、又は、其場所にあきたのであります。
- (三)眼を細め、或は、眼の中にうるみを持って、泣くのは、眠氣のさした、時であります。



(四)間をおき、ふしをつけて、泣く時は、空腹、又は、のんどの、かわいたので、あります、此時は、乳を與へるか、或は、さました湯を與へるがよくあります

(五)手足をもかき、全身に力を入れて、非常に、泣く事があります、此時は、からだの發育上、必要があつて、泣くのでありますから、十分か十五分位は、泣せてよろしくござます。

# フレーベル會俳句端書集

(一)課題 當季雜吟一人十句以下 (二)締切 八月二十五日限り (三)披露 明治三十八年十月發行本誌上 (四)賞品 天地人三座には景品を呈す (五)撰者 本會の撰評 (六)投稿 本誌購讀者は何人にも投吟する事を得用紙は繪葉書に限り (眞筆刷物隨意) 住所氏名雅號を明記し必らず左の名宛にて送らるべし、

埼玉縣入間郡芳野村フレーベル會俳句掛

鹽野奇零宛

## 第十三回俳句端書集

川船にとぶや聲の右左り	仙臺	一
追ひつめて見れば川あり聲狩	同	同
一と聲は隣りの門や初松魚	同	同
簞笠の霧に隠るゝ夏野かな	武藏	白醉樓
蟬啼くや松原十里風絶えて	同	同
五月雨や昨日の傘を又借りつ	同	同
蚊遣火に三郎を待つ次郎かな	東京	辰子
覗きく針箱を出す枕綱	同	同
ハスト流行る貧乏町や五月雨	同	同

早鯨のなる間に出て、松の月  
 伐株の桐の芽太し半夏生  
 枯かゝる梅の接木に毛虫哉  
 照りつゝく朝や青山の露曇り  
 沙さしてゆれる真蓮や行々子  
 今日も又昨日の垣や蝸牛  
 田へ配る水の工夫や雲の峯  
 炎夫や薙きせたる水車  
 戦死者の墓標たてけり栗の花  
 雨にして物憂き庭や柿の花  
 拜し去る如意輪堂や郭公  
 姉と妹瀬に螢をかぞへつゝ  
 峠三里旅の勞れや心太

三 光

人蚊柱を乗り崩しけり裸馬  
 地初螢あら千枝子さん春子さん  
 天喘ぎく峠半ばや蟬時雨  
 追 加  
 鹽 野 奇 零

夢秋や庭に煩張る握り飯  
 雨に風晴に曇りや五月空  
 入梅や人各々の腸も  
 胃を病みて輕き酔咏喧や五月雨  
 十日目に傘干して五月晴

仙臺 一 瓢  
 東京 春 棧  
 東京 春 山  
 大阪 きょ女  
 豊前 琴 月  
 栃木 閑 山  
 同 同  
 常陸 落花庵  
 秩父 尹 人  
 同 同  
 同 同  
 同 同

梅雨晴や雲切々に星まばら  
紫陽花や線香くさき寺の門  
植える田や晴より雨の賑やし  
虹消へる雨に涼しき田圃かな  
五月雨や届く封書の糊はなれ  
母衣軈や罪なき夢にうかざる  
納涼舟ハシカチふりし人戀し  
田五作の顔だけ黒き浴衣かな  
髭はやす歸省の兄の浴衣かな

### 短歌募集

▲課題 隨意

▲切 八月二十日限り

▲発表 本誌上

▲賞品 三光に粗景を呈す

▲撰評 みどり短歌會

▲投稿 用紙隨意、字体鮮明、左記の處宛に送らるべし

伊勢國河藝郡稻生村

みどり短歌會

### 平和 眞宮起雲

幸なれや姫か優手に活けられて神のみまへに匂ふ百百合  
獨たどる夢路はるかの海原や山も見分かすたゝ浪あらし  
終日にしなれし草木夕べ露にひとは情のいづみに活きむ  
うなな等が唄ふ罪なき譜に和して眞白き髻の翁立ち舞ふ  
エンセルの忘れがたみか翼生は御相宛然神にふさはし  
朝顔は露にひかり得人は子の笑まひのそれに平和を見る  
あさもやに室の音こもり神苑の紅蓮白蓮にほひあふる  
青によし奈良のふるやに歌おもひ聞かば興ある子規かな  
市に出て歌玉うらむ藝なし野のゆふへをば泣かば事足る  
よるこびはあしたに開く白蓮と愛の光のそらに充つる時

### 讀書の葉

家庭 教育 繪ばなし

繪を見たりかいたりするのは、子供の非常に喜ぶ  
ことであつて、殊に見る繪が自分等の平生親しく  
知つて居るものであると、其喜は又格別である。  
子供にこんな繪を與へることは、其美の情を養ふ

上からも、知識を與へる上からも、はた娛樂を與へる上からも、教育上頗る必要であるのに、我國では今まで、子供の爲といふ繪が教育的に出来て居なかつたのは、兒童教育上頗る遺憾であつた。あるものといふのは、彼の縁日や何かに出て居る、俗惡極まる畫題で、其彩色も何も丸で劣等であつたのである。

こゝに紹介する繪はなしは、教育上この缺陷を補はんがために出たもので、表紙の体裁から、中の印刷から、極めて見事である、紙も至極の上等で頁數は表紙とも十六頁、其中表紙ともに八頁は三色刷りの美麗な色刷りで、後は一度の石版刷り畫題は最も注意して子供に興味のある動物や鳥類や遊びの有様などを面白く畫いて、其間にちよいと僅ばかりの文字を入れて居る。子供の繪本

としては、至極上出来といつてよい今既に一號と二號とが出た、定價は一冊六錢發行所は神田錦町一ノ十の、家庭教育會

### なぐさめ草

加持世界といふ佛教雜誌の附録で、遠征の軍人慰問の目的で出来た小冊子併し。頁數は一三〇頁に餘つて居る。收むる所は最近の御製八十首を始めとして小説、詩、歌、俳句、説教等一々誦して自ら慰むべきもの殊に可憐なる小學兒童の時局に關する手紙數十篇を細かき字にて挿入したるはよき思ひ付なり（發行所は小石川大塚阪下町一七、加持世界支社）。

### 軍人慰問と親鸞上人小傳

文書傳道會といふのがあつて、そこから一冊三錢づゝ重いろゝ宗教上の書物を出版して發賣す

る、二冊とも其中の冊子である、前者は軍人傳道の爲めで例へば楠正成の宗教とか、繁十郎の奉公とか、忠と他力教とかといふ題を以て、平易に説いて居る後者は聖人の傳を極めて簡潔に述べて居る。

### 保育者のため

### 遊戲につきて

松本孝次郎

この一篇は嘗てフレーベル會上に於て成されたる演説の筆記なり

私は餘程以前から子供の遊戲のことを研究して見たいと思ふて居りましたが、御承知の如く幼稚園の仕事は自身でやつて居るのでございませぬからどうも其便利を得なかつたのでございますけれど、段々此フレーベル會の幼兒研究の組合の方々

に相談致しまして、會員の方々の御經驗を伺ひ、私も亦問題を提出致しまして皆さんの御意見を伺ひなどしてから、次第々々に遊戲といふことの自分の考といふものは段々明瞭になつて参りました、それで其問題に就きまして自分の自身に調べました道行を申しますと、初には此日本に現に行はれて居ります様な遊戲は、どれ位昔から傳つて居つてどういふ變遷があるかといふことを最初に心掛けて見たのであります、其方で申しますと、現今迄傳つて居る遊戲の行れて居りましたことは、餘程昔からあることでございまして、それで其變遷が政治の方で天皇の權力の御隆んであるやうな時代も、亦北條時代といふ様な武家が跋扈して居たやうな時代も、通じて割合に變りませぬところのものは、子供の遊戲のやうに考へら

れます、時代は非常に變つて行くけれども、其時代の變り方に從つて、何時も遊戲が或時代に行れて速に亡びて仕舞うといふことでなく、子供の世界は永久に續いて居るものであるやうに思はれたのでございます、併しある遊戲の種類は、又當時の時代の影響、即ち時代精神によりて變るのがあります、藤原時代の如きときでありますれば幾らか柔弱であり、武家時代に於けるときは尙武的の遊戲といふ様なものが、非常に發達して居るやうなことの徴候を看ることが出來ます、それでも又もう一つは此人間といふものは、時を経るに從つて段々發達して參りますからして、昔は大人がやりましたことも後世になりますと子供の仕事となつて、今大人がやりますれば到底笑はずに居られないことが幾らもございす、現に徳川時代の

頃に於きまして十八九なる婦人が竹馬に乗つて居ることがありましたが、あゝいふ様なことは現今では女子には見ることは出來ないやうでございす、それで時代の進歩は人間の發達を促して來るものでありますから、大人の昔やりました遊びが段々變りまして、今は子供式になつて了ふ、英國のエリサベス時代に行れた、舞踏のやうなものでも、今では全く町の子供に行れて居るやうなことでございす、さういふ事實は日本の遊戲の中にも見るのでございす、只今お話致しましたのは遊戲に就ての歴史でございす、併しこれに伴ひまして玩具——遊びの道具といふものも漸次に發達致しまして、子供の満足を起す爲に發明せられたるものも多くございす、それで玩具も昔から遊戲と共にちゃんと何時迄も傳つ

て居るものもあり、それには何か玩具といふものが、子供の保育のことに利益がなければ世の中に傳つて行くことはない譯であります、其方から玩具といふものが如何なる働きをして居るかといふことを調べて見たのでございまして、其方に於きましては、子供の身體の發育といふ別に利益のありまするところのものと、精神上に利益のありまするところのものとあることを明にすることが出来ました、そうして如何なる種類のものが根本的に是非欠くべからざるものであるかといふことも先づ推測することが出来ますのでございまして、それで玩具の中にも矢張時代精神の影響といふものがございまして、其時代々々の精神の爲に影響を蒙つて此玩具の變遷が起りますこともあるのでございまして、されど其根本的の玩具といふものはさ

ういふ變遷の爲には動されていないのでありまして昔から現今に至つて傳つてあるものがあるといふことが分ります、でさういふ遊戯玩具の歴史の側から見ました方も有益な結果があつたと思ひますが、次には此遊戯といふものを心理の方から見ましたところの考へと、もう一つは教育の方の側から考へました、即ち如何なる心の働きから子供は遊戯がしたいやうなことが起つて來るであらうか子供の天性として果して遊戯を好むものであるかと心理の側から研究も試みましたが、又教育上遊戯といふことがどれ程益があるかといふことも考へて見ました、其結果は矢張遊戯は立派に利益があるものであつて、精神及び身體の發達といふものには、欠くべからざるところのものであるといふことも知ることが出来ました、それから次には遊



戯に就きまして、フレール氏の方案になつて居りますところの方法を日本でも採用致しまして幾分かこれに日本流の考を入れて、現に皆さん方がおやりになつて居りますが、これ等も後々に至ると外國初め我國でも、段々經驗が集るに従つて色々變つて参ります、それが自然に變はるのでなく、幾らか幼稚園の事業に従事して居る方々が、どういふ様な風に變へて往つたら宜いか、如何なることが不満足であるかといふことを考なければならぬ、といふことを考へまして、其方から幾らかの問題の研究方を組合の方々にお話致しまして研究して戴きましたのでございます、さうしてこれが私の研究の上から見ますと第三段でございまず、應用する方の範圍の事柄でございまず、それで今日は其種類の或一つの事柄を申して置き

ませう、  
 で此研究組合の方々に私がお尋ね申したり、又御觀察を願ひましたのは、或一つの紙を兒童に渡しまして、其紙を以て何なりとも子供自からの發明に係るものを作らして呉れといふことを申しました、其紙の形は四角なものばかりでなく、三角なものも用ゐて呉れるといふことを申しました、其四角な紙と申しますと、御承知の如く始終幼稚園で使つて居ります形でございますけれども、三角といふ方は實際餘り用ゐぬところの形でございまずから、其兩方に依つて子供の發明といふことを知りたい考で、此問題を提出致しました、で、其問題に就きましては、皆さん方がおやりになりましたもの、標本は現に彼の處に陳列してある華族學校の中にありますが、さういふ風に子供に作ら

して、私は自身にこれを研究しました、元來心理學者の段々研究して居りますことに據りますと、子供の時分は大變に想像の働きが鋭くて、却て智識といふ方は鈍いので、まだ發達して居りませぬ、初めに子供が馬が欲しいといふときに、子供自身は竹の棒の上に跨つてつれで馬に乗つたりとして表を駆け歩いて居る、能く考へて見ると、竹の棒で決して馬でないのでございますが、併しそれを馬であると思つて喜んで乗つて居るのは、矢張竹の棒を馬である様に想像が附くからであります、で馬と全く違つて居る様に見えても竹の棒には乗りますけれども、併し外のこつぷとか茶碗の如きものに乗らない、されは違つて居ることは違つて居るが、其中でも幾らか似て居るところがあつて、乗つて見ることが出来るといふ丈は同じ

なところがあると思ひますからです、さうしますと初めの竹の棒で満足して居る時分は、丁度竹の棒が馬である如く想像して駆け走つて居ります、然るに少し經ちますといふと、段々それ丈では満足しない、もう少し馬の恰好が欲しいといふところから、先づ或子供は何か飾を附けまして馬の頭である様に拵へて、それで意氣揚々として居るところが、今度は似て居ると云つても、實際に似て居るのは頭丈で、身體其外に似たところがない、もう少し似た様にして欲しいといふ様になつて、終には全く馬の形をしたものでなければ満足は出来ぬといふことになるのであります、それから子供の想像で、初めは粗末な形で満足して居たものが、次第々々に精密に至ることになつて居る、丁度一番精密になつて参りますと全く馬の

形になります、それは博物の稽古に標本を子供に與へまして、これは馬であると言つて標本を見せるやうに、實際に社會にあるところのものを標本として玩具で見せて居るのであります。それでありますからそこで行詰れば、多くの玩具は社會の準備と言つても宜い様な目的を有つ故に、遊戲が其自然の智識で馬と類似の點が澤山なければ承知しないといふ様になれば、想像の働きは次第に減つて、智識の方が殖へて來たのであります。さうして見ますと、初めは子供の想像といふものを多く働せる玩具をやつた方が宜いか、又想像の働きはさう使はないでも精密に馬の觀念を與へるものをやつた方が宜いか、何方が宜いかといふことは餘程大問題であらうと思ひます、で精密なものをおたへれば子供は其類似を求める想像作用

を發達することが出來ぬから、寧ろ粗末なる玩具を與へる方が宜いかどうかといふことは、此子供のことを研究する人に就ての大問題になるのでございます。此ことからして、今度は其玩具を如何様に取扱つて行かなければならぬかといふことを定めるのが必要になつたのであります、それでさういふことの研究の結果と致しましては、子供の發達といふものが本統に十分になるやうにしやうといふには、子供が満足をする様にどこまでも與へなければならぬ、けれども其數には制限がある、小兒には其數を制限して置かなければならぬといふことがあります、それからもう一つは、さういふ様な想像を働かせる玩具を與へる必要がある、それで其事が幼稚園でやる事業の様ではどうなつて居るかといふと、幼稚園でやりますところの

仕事の上では、初めに幼稚園に來るところの子供は、未だ智識が十分に進んだといふ譯でなく、想像作用を働かす必要のある時代の者が、幼稚園に來るのではないかと思はれる、それで幼稚園には其想像作用を働かすところの方法として、何れ丈の物が備つて居るかといふと、幾らか吾々の考では不満足であります、さういふものに向つて如何にして子供の教育をさせることを致さうといふ考で先程お話しした様に紙を與へて、子供の想像にあるものを拵へさせて見ることをやりました、其紙の問題に就きましての結果を見ますと、彼處に陳列してございます様な風で、大人のとて思ひ及ばないことがあつて、三角の紙を折りましては烏であるやうに致しましたり、或はそれを蛙であるやうな風に致しましたり、種々の動物や或は其家

の中にある道具のやうなものを澤山作りました大人から見れば實物と同じところは殆どないと言つて宜い、幾分か形が似寄がある位であります、さういふ違つたものであつても、それを何か或物の名前を付けてさうして見て居るといふのは、子供の想像作用に訴へてさういふ名前を付けて居るのであります。さればあゝ云ふ遊びは、子供の想像を働かせることが出來ることになりはせぬかと思ひます。

そこで丁度此世の中のこととは何でも分業させる必要がある、フレーベル氏の恩物でもさうなつて居りますが、分業が必要でございます、恩物であつても同じやうな働きをさせてはいかぬそれ／＼違つた働きをさせて分業させてやるやうになつて居ります、それは縦令積木のやうなものか、板を並べ

まするやうなことがあつて、形の方に關係を致しまするところのものを與へる方には便利がございませけれども、動物植物の如きものを與へやうとすれば不便であります、あゝいふものを、以て動物物の組立といふものは旨くは出来ませぬ、遂に其形が違ふのであります、それでありますからして、さういふ天然の動植物に關係を致しましたやうなものは、却つて紙で折ります方が多くの便利がありはせぬかと思ひます、それで初まりは、大要を能く知らせる様にして、後には段々實物に近いやうな形にする、それで紙でございしますと、丁度板を並べますのと積木との中間の性質を有つて居ります、何故と申しますと、紙を折つて下に置きましますならば、これは平面圖であります、若し又一つの鳥などを紙で折りますれば、これは立

體圖であります、例へば蛙であるとか鶴であるとかいふものを折りますれば、これは立體の性質を有つて居ります、でありますから、紙でやらせますれば兩者の中間にあつて、心の働きを養ふことが出来ます、それで只今お話ししたやうな風に、幼稚園にては、想像作用を餘計勵すといふ目的の爲には、斯ういふ紙で以て仕事をさせますることが一つのよき方法と思ひます、これが爲に色々の工夫を致しますれば、教育上必要なる事情に向つての研究といふものが出来ることと思ひます。それで私は猶應用といふ種類の研究は、能くやつて見たいと思ひますので、願くは此ふレーベル會に御關係のある方々は幼兒研究組合の方々と御一緒になりまして、現今猶不完全なところの點を充分満足に致しまするやうに、猶大きく申し

ますればふれーべる氏の言に従つてやつて居ります。幼稚園の仕事、其不足を補つて行きたいと思ひます。又只今のお話に依りますれば、段々皆さん方の將來に於ての事業は有望であるといふことは、勿論明なることでございますけれども、猶此お話に附加へて喜ばしいことのお話を致しますそれは近來東京府下に於きまして、貴族院議員等の資格を有て居ります華族方がお寄集りになりまして、子供に關した話をお聞きになるのでございます。それで其方々が私の話をお聞きになりまして、其方々の仰しやるのに、實は自分達はこれまで子供のことに就いては智識のないものであるから、可愛がる餘りに役に立たぬことでもあるやうではならぬから、子供のことを能く知るやうにして、さうして子供の保育の利益になるやうにし

たいといふことで、その御夫人方お嬢さん方までが御希望でお話を致しますが、段々世の中の人が斯ういふことに重きを置かれるやうになりますれば、從ひまして幼稚園の事業の方のことが、どの位有益有用なることかも知れ渡ることは、喋々申上ぐるまでもないことと思ひます、そういう事情でございますから、益々皆さん方は此御研究に力を盡されんことを希望致します。

## 東京便り

▲「夕暮は夏のものなり都鳥」げに夏の夕ほど心行くものは候はじ堪えがたかりし晝間の暑さも一掬の涼しき夕風には名残もなく忘れ候。山河近き邊りの住居のゆかしきこと、四季何れと申さるれども、夏の景色は又殊更と存じ候。露白し槇の上

照る星月夜」などの感懷、とても都大路の夏の夕暮には望まれ得べくも候はず。

▲さて、其後は打ち絶へ御無沙汰を續け候、筆硯例の如くには候へども、兎角用がなくては一本の手紙も差し上げぬといふ悪い癖が生れ付き候ものから、此の次第、平に御免に預り度く、思ひ出し候ては獨り、心の中にて濟まぬくと存じ居りし次第に御座候。今回も殊更の用向と申すには候はねど、折柄夏の休とも相成り候、せめてもの御詫までに一筆御伺ひ申上候。

▲今便御報導致したきは、先月末開會の本會開設の夏期講習會の盛況に候。會は豫定の如く、先月二十一日に始まり候が、來會者は南より北より西より東より、遠きは朝鮮、臺灣の地方よりも有之候て、實に無慮百七十名に達し申候。以て如何にこ

の會が多數の期望に沿はれたるかを知らべく候。講師はかねて豫告の題目にて松本講師六時間、野口講師二時間、下田講師二時間、黒田講師十時間、中村講師六時間、東講師五時間といふ様な割合にて、何れも熱心講述せられ、會員一同も熱心は聴講せられ候。同二十九日は、お茶の水幼稚園にて全體の茶話會は頗る面白く且つ有益に開かれ、同三十日には聴了證明書を渡して茲に無事開會致し候。

▲御承知の如く、幼兒を保育する爲めの講習會と申すものは、東京に於ては實に今回が始めてに候。併して此の盛況を致し候。人々は意外の盛況だと申候。併し小生は當然の事として最初より期待致し候。兎に角これに由りて我保育界は幾多の有益なる刺戟を得られたる事は此上もなき事と存じ候。

草々

入會

樋口イク  
右木村良紹介

增田卯之助

永島ヤマ

榎本中三郎

字式かん

長  
寬  
子

山中權十郎

金原てい

右安田りん紹介

自明治三十八年六月廿六日  
至全七月廿六日

年 月 日

一〇〇	三七、一二一
一〇〇	三七、七——三八、四
一〇〇	三八、三——三八、一二

藤井重子  
須藤重子  
桐井重子

三二二二〇七  
一〇二六七八五五〇三三七  
一一二二〇〇二二三九六二五二三四

三八、三	三八、六
三八、七	三八、九
三八、五	三九、四
三八、四	三八、八
三七、七	三八、六
三八、三	三八、八
三八、七	三九、三
三六、八	三八、六
三八、六	三九、五
三八、一	三八、一〇
三七、九	三八、六
三八、一	三八、一二
三八、一	三八、一二
三七、八	三八、一二
三七、一二	三八、一二
三七、一	三八、一二
三六、三	三七、一〇
三七、七	三八、九
三七、九	三八、一一
三七、一二	三八、六
三八、二	三八、七
三八、一	三八、一二
三八、一	三八、一〇
三八、一	三八、七
三七、一二	三八、九
三七、一	三八、一〇
三七、一一	三八、一〇
三八、一	三八、一二
三七、八	三八、八

宇進宮谷大勝赤澤林猪小永嶺遠千坪村高福村京和樫大岡山川近塚  
佐藤地川村間村俣島井藤賀内尾橋本越口田口賀田内島澤本  
美つす久なこ君玉ハまふし千きマしゆじさいイふみかみ岩る  
はるほ満み米江井をマんきづ枝くサげきうだヨクくつつつ吉い



三七、一〇——三八、七  
三七、六——三八、五  
三八、五——三八、七  
三八、一——三八、七  
三八、一——三八、一〇  
三七、一一——三八、八  
三七、九——三八、六  
三七、七——三九、七  
三八、七——三八、九  
三六、九——三七、六  
三八、七——三八、一二  
三八、六——三八、八  
三八、六——三八、一〇  
三八、四——三八、九  
三八、一——三八、六  
三八、一——三八、六  
三七、四——三八、八  
三七、一——三八、六  
三七、一二——三八、六  
三七、一二——三八、六  
三八、一——三八、六  
三七、一一——三八、六  
三五、九——三六、六  
三八、一——三八、六  
三七、一一——三八、六  
三八、四——三八、六  
三七、一二——三八、六  
三七、一二——三八、六

島加福玉三岩丸石岡柴酒伊坂岡司石柄増津永馬永神矢山高小平八  
居藤井井須川山井山田井藤井本馬山越田田島場田通野本安平田坂  
した 榮之助 しまさ 次吉 た冬 ぶいん ぶ 恵 わ さ 助 徳 や ま き い き かつ の ま 幸 乃 だ  
げけ 榮 助 しまさ 次吉 た冬 ぶいん ぶ 恵 わ さ 助 徳 や ま き い き かつ の ま 幸 乃 だ

[illegible]

佐西滿佐山廣松吉松野岩笠佐野古池小藤水鈴大武三永羽藤今兒瀧  
久村き岡藤田瀬島し本澤崎井藤村市田林村口木山田田地利田並井玉澤  
間さしサ都千ま八しょ繁あた梅すそいみた千ま利待つ糸よ  
ねえヨ也代さ重う子いづ野様さ幸の徳とつつけ代つ徳枝幸喜女子う

中 桐 確 太 郎  
大 河 合 ち ち 太 郎  
寺 尾 合 ち ち 太 郎  
川 村 鉄 太 郎  
利 光 太 郎  
小 關 太 郎  
岩 田 太 郎  
桑 田 太 郎  
川 村 太 郎  
上 遠 野 太 郎  
三 宅 太 郎  
山 田 太 郎  
西 川 太 郎  
池 田 太 郎  
脇 田 太 郎  
内 藤 太 郎  
志 村 太 郎  
小 西 太 郎  
藤 森 太 郎  
宇 式 太 郎  
榎 本 太 郎  
江 原 太 郎  
金 原 太 郎  
頼 野 太 郎  
萩 野 太 郎  
池 田 太 郎  
池 田 太 郎

六十三

▲▲第二回幼稚園保母志願者募集(業者凡五十名ノ見込)

▲今回は主として園長主任保母志願者を

募る

近來、各地に於て頻りに幼稚園長及主任保母を要するあるもその適任者を得るに苦しみつゝあるは斯道の爲めに遺憾とする所なり依りて今般右志願者の爲に必要なる教育を施し世の需要に應ぜんとす此際志願者は左の要項に依り申込まるべし

一 修業年限 凡四ヶ月(至三十八年九月十二月)

一 授業 是毎日午後三時三十分より六時三十分、但實地練習時間は別に之を定む

一 學科 是教育學保育法音樂手技等とす  
一 入學志願者の 資格は高等女學校卒業若くは小學校准教員以上の學力ある者

但し相當の學力經歷を有するものは特に入學せしむることあるべし

一 授業料 一八ヶ月金壹圓五拾錢とす

一 入學志願者 是履歷書、入學金五拾錢を添へて申込むべし(入學書式は普通書式の通り)

一 講師

女子高等師範教授兼附屬幼稚園主事 中村 五 六 君  
教授 東 基 吉 君  
教授兼保母 下田 鶴 子 君  
東京府女子師範學校教諭 丸山とめ子君

東京市神田區表神保町壹番地一ツ橋幼稚園構内 東京保母養成所

(電話本局一三四九)

# 特色

六かしい理屈は云はないで實用ばかり

やさいい文章で、おもしろい。かきかた  
子供の育てかたには、一心ふらん  
質問は遠慮なし返事は親切でわかるまで

第一號再版出來

第三號

行發日一月八

明治の家庭

每月一回一日發行●一冊前金六錢六冊郵稅共三拾三錢十二冊一拾年分金六拾錢也

○い伽嘶の懸賞募集

第一等賞金

五圓◎私日本好

三

繪

●●●●●  
夏の遊びと新  
子供の妙好心

按の水鐵砲……岸邊東洋幼稚園長●汗もの手入れの仕方

健

哉

●夢を見て泣く兒につぎ……醫學博士 三島通良●  
●武坊が培つた野菜のど馳走農科大學 澤田寛人●貞節な音楽家 子供に菓物を與へる時刻

太

東

●子供がとんぼを捕るのは善ひ遊  
●兄弟喧嘩の裁判の仕方  
●目醒めの悪い兒  
●行儀作法で育てられた我が老立  
●質問憂慮なし

白

虹

●家事のいろいろ  
●産前産後の書物  
●經濟問題の返事  
●經濟問題  
●三島博士の手紙  
●質問遠慮なし

100

100

花嫁の日記  
西洋洗濯は  
どうするか  
龍  
か  
よ  
子  
●  
子供のお  
臀をぶつ  
事  
●  
結婚當時  
の所感  
●  
潭

類梓

牛子

●煙草の吹い残りを利用した千葉博士の女中

•

10

後付の二

社庭家の治明六町戸納區込牛市京東所行發  
局本話電三館文寶自丁三町石本區橋本日市京東元賣發

# 誌面革新

本誌は發行以來歲を閱すること九星霜、號を  
 ぬること百六十有餘に及び、我邦女學雜誌  
 中最良最好の定評あるは言を俟たざる所な  
 り。今也時局の益々進歩するに従ひ我邦女子  
 教育及び文學技藝の愈々必要を感ずるに至  
 り、本誌亦其の内容、外形を革新し、毎月十日  
 の發行とし、時々臨時増刊し、以て時勢の急需  
 に應じ、聊國家社會に貢獻する所あらんこと  
 を期せり、希くは大方の諸君續々御購讀の榮  
 を與へられんことを

# 女子之友

毎月十日發行、  
 定價一冊金十錢、  
 六冊前金五十七  
 錢、十二冊前金一  
 圓十錢、  
 全國無遞送料

# 投稿歡迎

本誌投稿者は從來婦人にのみ限り居候處、今  
 同誌面の改良と共に、論說、家庭、漫錄、小説、  
 文苑、寄書、月の桂、學の庭、及び雜報等の諸欄  
 は男女を問はず、廣く投稿を歡迎致すべく候  
 間、苟も女子の教育及び文學技藝に就き世上  
 に裨益する所あらんとの御好意ある諸賢は何  
 卒御投稿被成下候様希上候  
 但し誌友文壇は女子に限る

## 發行所

東京市牛込區市谷  
 田町二丁目卅番地

## 文友社

明治  
 才媛 **新體詩第一集** 定價貳拾五錢  
 郵稅二錢

本書は「女子之友」發行所なる文友社に於  
 て懸賞募集により當選したるもの并に同  
 誌課題中優秀なるもの等現代の才媛名妃  
 七十餘名の新體詩を編纂し之れに加ふる  
 に、陸軍教授兼國學院講師丸山松廬先生外  
 東都斯道の名家數氏の適切趣味ある評語  
 を以てし且つ作者十數名の艷麗花の如き  
 肖像を挿みたるものなれば清麗優雅古今  
 比類なき良書なりされば苟も斯道に志あ  
 る人は必ず一本を購讀して現代女流文學  
 の如何に進歩しつゝあるかを知り給へ

東京市牛込區市谷田町二ノ三〇

## 文友社發行

# 教師及父兄の讀物

學習院教授 大村仁太郎先生編述

(新版發賣)



洋裝全一冊  
定價金七十錢  
郵税金八錢

大村教授、我が子の惡徳を編述してその價值好評噴々四月を出で拾版を重ぬるに至れ惡徳は學校に於て「互に相學校及家庭教育の改善を導く文章は平易輕妙あるべきか」は「我が子の美德」にて表彰せらる。彼れ此れは消極と積極の對象にして、以て反省せしもの又本書にて兒童の導く文章は平易輕妙の惡徳を讀みて反省せしもの又本書にて兒童の導く文章は平易輕妙

教育學術研究會編纂

## 教育辭書

洋裝全五冊定價金五圓  
小包金料卅錢製上料六錢拾錢

特價金四圓

九月限 (別料送料本製)



七月十日發行 第五號 每月一回發行

- ▲よくつれて……(口 繪)▲まといの時……今西重公子
- ▲あめかざ……記 者▲和歌……三宅花園選
- ▲葡萄の蔓……大村仁太郎▲紅の話……幡 幽 泉
- ▲一女子に答ふ……中島 徳藏▲どちらが羨ましいでしょう
- ▲畧中の子供……山本きよ子 か……かきみね
- ▲梅雨のつれづれ……三宅花園▲男子に與ふる書……劉 芳 子
- ▲とりつかうか、ひつつかう……いうせむ●婦人の眼に映する若き男子
- ▲當世奥樣氣質……中島きよ子●輕薄なる女性的男子を排す
- ▲文祿時代の智選び……柴田 常惠▲てがる料理……ゆふづき
- ▲お濱さん……沼田 笠峯▲料理の切形……石井泰次郎
- ▲母様に御注意……天籟道人▲高千穂小學校●新刊紹介

一冊代價金九錢六冊十五錢

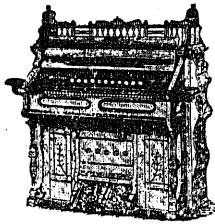
發兌 東京市神保町二區 同文館 大關 大阪後備區 寶文館

(婦人の子とも第五卷第八號)  
(明治三十八年八月五日發行)(每月一回五日發行)

山葉製風琴、第五回國內博覽會、於第一等賞牌ヲ受領セリ

山 葉 製 風 琴  
(附 險 保)

壹號	形金拾六圓五拾錢
貳號	形金廿六圓五拾錢
參號	形金參拾七圓
四號	形金四拾參圓
五號	形金四拾八圓
六號	形金五拾五圓
七號	形金六拾五圓
八號	形金七拾五圓
九號	形金百圓
十號	形金百貳拾圓
第壹號	金百參拾圓
全貳號	金百五拾圓
全參號	金貳百圓
新形壹號	金貳拾圓
全貳號	金四拾五圓
足折形一號	金廿五圓
全貳號	金參拾五圓



○山葉製洋琴 金參百圓以上  
種

●舶來洋琴 三百圓以上三千圓迄各種  
●舶來風琴 百圓以上千五百圓迄各種  
○鈴木製ヴァイオリン  
●金五圓以上五  
●十圓迄各種其  
●他弓箱附屬品  
●等各種

●舶來ヴァイオリン及弓箱等各種  
●樂隊用陸軍々樂用吹奏樂器各種  
●戰捷紀念國旗吹奏樂器一種  
●八人組織簡易吹奏樂器一種金參拾圓  
●右の外手風琴、ハーモニカ、舶來フラジ  
●ヨール、ト各樂器附屬品、和洋音樂書  
●各種郵券貳錢御送附わらば美麗なる目  
●錄進呈す



新刊音樂書

林廣守作曲、ノエルベリー先生和聲  
 一君 が 代 美本  
 高須治輔先生作歌、本元子作曲  
 一西比利亞 地 理 唱 歌 頗美本  
 北村季晴先生作 (第參版發行)  
 一叙事唱歌 須 磨 の 曲 頗美本  
 一全篇 離 れ 小 島 頗美本  
 一全篇 露 營 の 夢 頗美本  
 一第三篇 露 營 の 夢 頗美本  
 ノエル、ベリー先生編  
 一オールガン、ピアノ 練習書 大形洋裝

定價金 拾錢	不要郵稅
定價金 拾錢	郵稅金二錢
定價金貳拾五錢	郵稅金四錢
定價金貳拾五錢	郵稅金四錢
定價金貳拾五錢	郵稅金四錢
定價金五拾錢	郵稅金八錢

シガラオノアピ

# 調律修繕

東竹市京町三十番地  
共益商社樂器店  
電話新橋五路九二五號